循環魔術の継承者――双極魔術第二集

青朱白玄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
循環魔術の継承者――双極魔術第二集

【Ｎコード】
Ｎ４７０８Ｗ

【作者名】
青朱白玄

【あらすじ】
魔法とはマナを消費して呪文の効果を発揮するもの。この常識を最初に言葉にしたのは誰だったのだろうね？　ここにひとりの達人が登場する。達人は長きに渡る鍛錬の末、常識を乗り越えた。彼が自分を魔法使いとすら認識していなかったことを、君は信じられるかね？　彼は長いこと、自分はナイフ使いだと信じてきたし、実際呪文などひとつも唱えられない。それでも達人の技は魔術に他ならなかったんだ。究極魔術とさえ、呼べる魔術だよ。――――――ご注意：この作品は、本文、前書き、後書き、タイトルなどを予告な

く差し替えることがあります。ご了承ください。ブログにて当作品の関連情報を提供しております。よろしければそちらもご覧ください。品質と技術向上のため、厳しいご指摘でも感想にいただけますと幸いです。

・独自用語の注釈　（前書き）

いよいよ第二集に突入です。

シリーズ物ですので前作が存在しますが、たぶんこちらより読みにくいですし、単独でも読めるようにしておきたいので、説明を入れておこうかと存じます。

書くにつれ説明が必要な用語が増えると思いますので、適宜更新いたします。

もしこちらをご覧になって、前作も読んでみたい、と思われましたらどうぞ、シリーズ第一集「双極魔術の迷い人」もお読みになってください。

お楽しみいただけましたら幸い、ついでに評価などもいただければなお幸いでございます。

なお、この注釈は読まずに飛ばしても一向に問題ありません。

○ご注意：

・この作品は、本文、前書き、後書き、タイトルなどを予告なく差し替えることがあります。ご了承ください。

・ブログにて当シリーズの関連情報（小ネタ）を提供しております。よろしければそちらもご覧ください。
ｈｔｔｐ：／／ａｍｅｂｌｏ．ｊｐ／ｓｃｏｐｓ－－ｏｗｌ／

・品質と技術向上のため、厳しいご指摘でも感想にいただけますと嬉しく思います。

・独自用語の注釈

魔法……マナを操って不思議を起こす技術の総称。魔術（杖魔法）、虹魔法（精霊魔法）、聖魔法、黒魔法など。

マナ……魔法の燃料にあたるエネルギー。生物・無生物自身が持っているマナと、環境（空間、大地）が持っているマナがある。通常は魔法を使う場合、自分自身のマナを消費する。

呪文……火球の呪文のように、個別の魔法を指して使う。

魔法使い……系統を問わず、魔法を使う者。

静心応魔……魔法使いの能力。呪文や道具に頼らずマナを感じ取る。パティはこれを信じがたいレベルで使いこなす。

詠唱……魔法を使うために（通常は）必要な呪文文章を唱える行為。魔術にはさまざまな詠唱技術がある。

無詠唱……魔術の詠唱技術のひとつで、声に出す詠唱なしで呪文を使う技術。使用するマナは通常より増え、呪文の精度と威力が落ちる。無詠唱で呪文を使うにはその呪文に極度の熟練を要する。ヴァンは無詠唱を多用する。

魔術／魔術師……最も人為的な魔法の系統。またその使い手。

虹魔法／精霊魔法／虹使い……最も原始的な魔法の系統とその使い手。精霊を呼び出し、その力を呪文として使う。

反発……魔法に抗うこと。成功すれば呪文の効果を免れたり、弱めたりできる。反発できない呪文も存在する。

身体賦活……魔術の呪文。身体能力を向上させる。ヴァンは闇商人と長期的な戦いをするにあたり、この系統の最上級の呪文を使った。十日間有効にしたため、本作序盤でも有効。

遺跡潜り……財宝などを求めて、古代の遺跡を漁る者たち／職業。戦士、業師、各種魔法使いなどで構成される三から六人程度のグループで行動することが多い。

業師……遺跡潜りで必要になる、罠の対処や隠密行動、独自の戦闘術などに通じる多技能者。口が悪いものは技術の類似性から「盗賊」と呼んだりする。

偽竜……闇商人ビダーの使用した、竜に似た大型の兵器級魔法生物。邪悪さと狡猾さを兼ね備え、戦闘能力も高くヴァンを苦しめた。（一見ヴァンが圧勝したように思えるのは、ヴァンが最初から全力で攻め続けたため）

ビダー／ラドイッツ……前作でヴァンが戦った闇商人の元締め。

ヘイン……山賊の頭領をしていた超戦士。パティを含む少年少女たちを奴隷として売ろうとしていた。

ニーズ（街）……中央に運河が流れる街。商業が盛ん。

守護獣……ヴァンがパティを守らせるために造った魔法生物。普段は腕輪の中にいて、パティが攻撃されそうになると現れる。狼型。

（前作からの登場人物）

ヴァン……本作の主人公。魔術師。十七歳。

ルーシャ／ルーシャリエ……ヴァンと共に旅をする少女。業師。十五歳。

パティ……ヴァンによって魔術の才能を見出された少女。十二歳。魔術の修行中。親に売られて山賊のもとにいた。

ホッグ……ヘイン率いる山賊の一員だった髭面の小男。お腹が出ている。賭けに負けてルーシャの言いなりになっている。

※適宜更新します。

一・ちょっと遺跡まで

太陽には言葉もなかった。
それはそうだろう。雲が空を分厚く覆い尽くしてしまい、大泣きしているのだ。しかも泣いている理由というのが、王の退位を嘆いているというのだから意味が分からない。
太陽を天空の玉座から放逐したのは、他でもない雲自身なのに。

＊＊＊

雲の涙が落ちる音は酒場の雑音をかき消すまでになっていたので、ヴァンは声を張り上げざるを得なかった。
黒髪に同色の瞳の青年である。動きやすいように、長めの髪を後ろでひとまとめに括っている。着ているのは魔術師のローブだ。

「こんな天気でも馬車は出るのかい？」

赤ら顔の御者はやはり怒鳴るような声で答えた。

「客次第だ。出さなきゃ飯が食えねえし、乗る奴がいねえのに出してもやっぱり食えなくなる」
「今日はどうなんだ？」
「金のなさそうな娘っ子がひとり、乗ることになってる。そいつが来るなら出るが、来なきゃ料金が倍になる」
「到着日程は遅れないか？　本当に五日で着くのか？」
「そこまで保証はできんよ。マーヴァルの都に着きさえすりゃ、おいらの仕事は終わりだ」

＊＊＊

「先生、できるようになったよ」

酒場の片隅の席で、パティは小声で呪文を唱え、様々な色の光を次々とワンドの先に灯しては消してみせた。もちろん遊びなどではなく、れっきとした魔術の訓練だ。

パティは魔術の非凡な才能を見出された、金髪の少女である。肩までのやや癖のある髪を揺らし、好奇心の強さを物語るかのような大きめの瞳を輝かせて、呪文を唱え続ける。

魔術学校に入学させるために王都マーヴァルまで連れて行くつもりなのだが、それまでに少しでも教えておこうと、ヴァンが臨時の先生になっているのであった。

「さすがに早いな。呪文を覚えるとこからそこまで、半日もかからんか。まあ、今日は色をもっと細かく変える練習に専念しよう。そうそう、駅馬車は何があっても出るらしい」

これに答えたのは癖のない長い銀髪の娘だった。

「馬がかわいそう……」

「ルーシャ、馬はともかくお前が心配なんだが……」

「大丈夫だってば。酔ってたのは昔の話。今は平気」

「ならいいんだが……」

「姐さん、酔い止めならありやすぜ？　おいらも実は、乗り物に弱くて……」

「ホッグ、あたしは本当に平気なの。それより早く、表か裏か当ててよ」

ホッグと呼ばれたお腹の出た髭面の小男は、慌てて裏を宣言した。

今はルーシャのお付きみたいなことをしているが、少し前までは

山賊の一味にいた男だ。誰も信じないだろうが……。

酒場の扉が開いて、限界まで膨らんだ背負袋に潰されそうな少女が現れた。黒い髪を短めに刈り揃えている、大人しそうな娘だった。

よろけながら入ってきて、待ち合いの一角に近づいてくる。

「すみません、遅くなりました……」

「ちっ、料金は通常通りか。お客さん方、乗っとくれ！」

やがて駅馬車は視界が悪い中、ニーズの街を出た。

目指すはマーヴァル王国の同名の王都。

五月二十六日の午後のことであった。

＊＊＊

ふと考えごとから我に帰ったヴァンは、遅れてきた女の子が明かりの呪文の練習をしているパティを、ときおり盗み見ているのに気づいた。どうやら話しかけていいか迷っているらしい。

「パティ、ちょっと休まないか？」

「うん……けっこう疲れるね」

「あの……こんにちは」

案の定、女の子が話しかけてきた。パティは、自分が話しかけられていると気づくまで、少し時間がかかった。

「え？　あ、こんにちは」

「ごめんなさい、さっきから見てました。すごいですね！」

「そう、なのかな？　ありがとう」

照れくさそうに笑う。

「あたしパティ」

「エレンです。パティさんは魔術学校の学生さんですよね？　何年生ですか？」

「ううん、これから入学するの。だよね、先生？」

「そうだな。オレはヴァン。よろしくな」

「ヴァンさんは、どこかの学校の先生なんですか？」

「そういうわけじゃない。パティが入学するまでに少しでも成績の底上げをしてやろうと、臨時の先生をやってるだけだ。エレンは学生なのか？」

「いえ、私もこの秋に入学するんです。でも寮の部屋が早く空いたから、引っ越して来いって学長さんからお手紙が届いて。うち、貧乏だから両親に笑顔で追い出されちゃいました」

言ってエレンは笑った。

「ねえねえ、エレンって何歳？　あたし十二歳！」

「じゃあパティと同い年ですね」

「だったらもっと普通に話そうよ。エレンの話し方、大人みたい」

「あ、うん。分かった。パティはどこに入学するの？　同じ学校だったらいいな」

「先生が一番いいところに入れてくれるって」

「それなら、あたしと同じテミスレア魔術学園か、王立魔術学院だね。テミスレアに来ない？　きっと楽しいよ」

「いいんじゃないか？　さっそく友達もできたんだし」

パティが何か言う前に答えを出すヴァン。

「やったあ！」

「ずいぶん嬉しそうだな」
「だって先生、あたし同い年の友達って初めてだもん。村には子供、少なかったし」
「着いたら学長さんに、相部屋になれないか聞いてみるね。パティが嫌じゃなかったらだけど……気が早いかな？」
「ううん、嫌じゃないよ！」
「あ、でも八月下旬にならないと普通の人は寮に住めないはずだから……」
「それくらいだったら交渉してみるさ。材料はあるしな」
「材料？」
「呪文のために通常の四分の一しかマナを使わない、ってパティの才能を見せりゃ、大抵のことは断れないだろ。よそに持ってかれたら泣くのは向こうだ。ところでエレン、君は学長さんとどういう関係があるんだ？」
「お婆ちゃんが学長さんと仲が良かったらしくて……」

エレンは祖母に魔術の才を見出され、学長に頼んで入学することになったらしい。
家が貧しいので、学費が払えないと彼女の両親が泣き言を漏らすと、それも交渉して奨学生扱いにさせたというのだからやるものである。
その後も三人はいろいろな話をして盛り上がった。
ルーシャはホッグと銀貨を使った賭けをしてしきりに笑っていた。ホッグは対照的に泣き顔。
どうせ、いかさまをされているのだろう。

＊＊＊

天気のおかげで時刻は分かりにくかったが、完全な闇が訪れる前に小さな宿場町に到着した。

ヴァンは御者から指定された安宿にふたつ部屋を借りた。ついでにエレンも呼び、今は全員が同じ部屋にいる。

「考えたんだが、やはり馬車は途中で降りることにした」

「どうして？」

訊き返したのはルーシャだ。遊戯札でホッグと遊んでいる。

「偽竜だよ。どうしても気になってな。北西の遺跡群の要塞遺跡から見つかったらしいんだが、調べてみようと思う」

偽竜とは魔法で作られた怪物で、その姿はドラゴンに似ており、知性と邪悪さを兼ね備えた、生きる兵器だった。

ヴァンは一昨日この魔物を死闘の果てに討ったばかりだ。

強力な守りの護符がなかったらヴァンの方が先に死んでいた。何しろ、致命傷を肩代わりする護符が壊れたのだから間違いない。

「何が引っかかってるの？」

「持ち帰ったって遺跡潜りたちの評判を聞いたら、素人よりいくらかましって程度の連中だと分かった。とてもじゃないが、偽竜みたいなものを自力で入手できるとは思えない。だが誰かの助けを借りたわけでもなく、確かに自分たちだけで持って帰っている。それを可能にする何かがあったんだ」

「その何かを突き止めたいわけね」

「ああ。だから、予定通りなら明後日の昼前に降りる。そうだ、パティはまだマナが余ってるな？」

「うん。明かりの呪文だとがんばってもほとんど減らないよ」

「まあ、マナの量を数値化するときに単位扱いされるくらい消費が少ないからな。今から壁に呪文吸収の処理をするから、光の矢の練習だ」

「え？　パティって攻撃呪文も使えるの？」

エレンが驚きの声を上げた。

「最初に教えた。光の矢は呪文を操る練習にちょうどいいからな。軌道を変化させる練習をすればいい。その軌道変化のさせ方だが……」

こつを説明していく。エレンも興味津々といった様子だった。

「まあ、パティならすぐ覚えるだろう。とりあえずは三種類、前もって設定した軌道で飛ばす、飛ばしてから軌道を変更する、飛ばしてからの軌道を三回曲げる、これらを少しの変化でいいから覚えてもらう。その前に、光の矢の速度を落として使う練習からだが。エレンもやってみたそうだな？　ルーシャ、光の矢が二本になっても平気か？」

「ゆっくり飛んでくるんでしょ？　二十本でも平気じゃないかな」

「あたしもお邪魔していいんですか？」

「ああ。やってみな。面白いぜ」

ふたりとも筋は良かった。

パティはエレンという競争相手がいることで、いつも以上に集中しているように見えた。結局マナが尽きる前に課題の最終段階まで達成してしまった。

「パティ、よく頑張ったな。明日の夜にはもっと変化させる練習をしてみよう。エレンも大したもんだ。基礎の呪文はひと通り使えるんじゃないか？」

「はい。でもこういう訓練は初めてでした。正直な使い方ばかりで……」

「まあ、普通はそうだろうな。ふたりともマナがほとんど残ってないから、後は……エレン、パティに読み書きを教えてやってくれないか？」
「え？　パティって読み書きできないんですか？　じゃあどうやって呪文を？」
「丸暗記させただけだよ。文字をゆっくり読むことはできるようになったが、書く方じゃいくつかすぐには思い出せない字がある。今日は調子がいいからな。そっちも一気に進むんじゃないか？」
「先生の意地悪！」

平和に夜は更けていった。

＊＊＊

地上からは見えない星たちに慰められたとみえて、翌朝には雲は大泣きをやめ、地に落ちる涙もだいぶ勢いを減じていた。

駅馬車も順調に進み、次の宿場町へは雲が赤くなってからほどなく到着した。ここでもやはり安宿を指定された。宿となんらかの約束でもあるのかも知れないとヴァンは思った。

昨日と同じような一幕の中で、ついにパティはすべての文字を滞りなく書けるようになった。綴りで間違えることはあるものの、これは大した進歩だった。

ただ、残念なことにヴァンはその頃、御者と話をしていた。

＊＊＊

「途中で降ろせ？」

「立ち寄りたい場所があってな。料金は全額ちゃんと払う。文句はないだろう？」
「ふん……どこで降りるって？」
「街道沿いの次の村か町がいい」
「降りるのは何人だ？」
「四人」
「分かった。好きにしな」
「ありがとさん。これで一杯飲ってくれ」
金貨を一枚置いてヴァンは席を立った。

＊＊＊

部屋に戻ったヴァンは、色とりどりの魔法の明かりがたくさん灯っているのを見て面食らった。

「何してるんだ？」
「パティが文字を書けるようになったお祝いに、明かりの呪文でおめでとうって書いてたの。色もつけられたらよかったんだけど……そういえばあれってどうやるんですか？」
「マナの属性を変化させるんだ。呪文文章は一文字もいじらない」
「マナの属性？」
「エレン、マナを生身で感じ取る訓練はしたか？」
「はい。静心応魔ですよね？　修行の最初くらいにちょっとしました」
「マナに色がついているように感じられたことはなかったか？」
「そういえばそんなこともあったかも……」
「感情が昂ぶってる人間のマナは、属性が表に出やすい。色となってな。今のパティのマナを感じてみな」
「……少し青いような……」

「青は水のマナの色だ。赤は火、黄が地、白が風。属性を出していないマナは実は薄い緑だ。無のマナとも言う」
「先生も水、ルーシャさんは風、エレンとホッグさんは地だね」
「え、パティ、そこまで分かるの？　だって色が……」
「パティはこれが得意なんだ。下手な呪文よりも信頼できるくらいにな。感情が昂ってなくてもマナの色はちゃんとあるから見分けられる……あの御者、火だな」
「すごい……」
「で、マナの属性は個人に備わった資質だから変えようがないが、マナの一部を別の属性に変えることはできる。もしできなかったら自分の属性以外の属性呪文は、絶対に使えなくなっちまうからな。そうやって変えたマナを使って明かりを唱えると光に色がつくわけだ」
「先生、属性呪文って？」
「火の呪文、氷の呪文みたいに、元素と関係が深い呪文だ。攻撃用の呪文に多い。例えば火球爆発とかな。自分と同じ属性の呪文は扱いやすい。たぶん威力も増すはずだ」
「あの……ヴァンさん、王都に着くまで私の先生もしてもらえませんか？」
「すまん。オレたちは明日、馬車を降りるんだ。寄って行きたい所があってな」
「そうでしたね……どこへ行かれるんでしたっけ？」
「ちょっと遺跡まで、な」

一・ま、いっか

雲の気持ちはだいぶ落ち着いてきたが、泣くのはまだやめなかった。気にかけてもらえるのが嬉しかったからだ。

＊＊＊

馬車は水たまりを踏んで跳ねさせながら村に入った。ひとつきりであろう食堂の前に停まる。四頭の馬たちはいななく元気もなく震えている。

「ほい降りた降りたぁ、少し早いが昼飯にしてくれぇ。おっと、あんたたちはここでお別れだったな」

「ああ。世話になった」

「……金額に間違いなし、と。ニーズに来るときはまた乗ってくれ」

エレンは心細げな声を出した。

「パティ……」

そしてパティの右手を両手で包みこむ。パティは慰めるように返した。

「エレン、すぐに追いつくから。だから寮の話はお願いね」

「うん。きっとだよ」

「なあ、悪いがこの手紙を学長さんに渡しといてくれるか？」

「分かりました。じゃあ、少しの間さよならです」

エレンは手を離すと小さく振ってみせた。パティが同じようにし

て応えた。ヴァンたちも思い思いの仕草で別れを告げた。

「さて、ここからは何時間か歩きだ。疲れたら休むから言ってくれ」

＊＊＊

村から西方向には岩石ばかりの荒地が広がっていて、四人は岩に手をついたりして転ばないように進む必要があった。濡れて滑りやすくなっている岩はそれを余計に困難にし、パティとホッグは何度も転びかけてはヴァンたちに支えられて難を逃れていた。

やがて少しは平らな土の盆地に出ると、今度はぬかるみに足を取られないよう気をつけながら歩くことになった。さらに進むと白く霞む視界に少しずつ森が見えてきた。ヴァンは迷わず入っていく。

そうして休憩を挟みつつ歩くこと数時間、木々が消えたかと思うと古い石造りの廃墟群が見えてきた。廃墟といっても朽ちたり壊れたりといった箇所は少ない。古代の素朴な建築技術は魔法の併用もあり、簡単には形が崩れない建物を作ることに長けていたのだ。

この遺跡群の中に、目的の要塞跡がある。

進むにつれ、少しずつ建築物が密集し始める。このあたりはもう、古代の街の中と呼べるだろう。

そして霧雨に白む視界に城の朧げな影が見え始めた頃。

「ここだ。第四要塞遺跡……中に動くものがいるな。巨大昆虫の類か」

ここまで無言だったルーシャが疑問を投げかけた。

「ヴァン、四つの要塞跡とやらを見て思ったんだけどさ、本当にこれって要塞だったの？　二階建ての守りが堅そうな施設がぽつんとあるだけで、胸壁みたいなものもないじゃない？」

「胸壁は魔法で作ってたんだよ。強力な結界。強力ではあっても耐久力は無限じゃないから、わざと結界を作り出す要塞は結界の外に置いた。攻められることになるが、防衛側も積極的に攻撃に回れるってわけだ」
「へぇ」
「さて、疲れてなかったらさっさと入るぞ。中の危険はあらかた排除されてるらしいしな。パティ、明かりを頼む」

言ってワンドを取り出し、呪文を待つ。パティは完璧な発音で明かりの呪文を使い、十分な光量の白い光を先端に灯した。

＊＊＊

遺跡はさまざまな侵入者排除の仕掛けの痕跡が残る、迷路状の建築物になっていたが、やはり探索済みだけあって何の障害もなく奥まで辿りつけた。
途中一度だけ、羽根を広げた長さが約二メートルの巨大な蛾が近づいてきたが、ヴァンの氷の戒めの呪文で球状の氷に閉じ込められた。
羽ばたきをやめた羽虫は当然、落下する。幸いなことに氷塊は落下の衝撃で嫌な音を立ててひびだらけになり、中の様子は見えなくなった。

最奥の部屋は隠し部屋になっていたようで、そこに台座が三つ、大中小と並んでいた。
「ここに偽竜が置かれてたんだ……妙だな。強力な魔法の仕掛けが無力化されている。連中にできたとは思えない……仕掛けをいじったのは例の遺跡潜りじゃないな」

「どういうこと？」
「遺跡潜りがここに入ったとき、魔法の守りはすでに働いていなかったんだ。誰かが偽竜をすぐにでも取れる状態にしておいて、そのまま手も触れずに帰ったってことだ。しかし何のためにそんなことをする？」

ヴァンが考え込んでいると、ルーシャとパティが同時に何かに気づいたように身動きを止めた。注意を集中させている。
やや遅れてそれに気づく。

「ん、どうした、ふたりとも？」
「ヴァン、誰かが助けを求めてる。急ぎましょう」
「走って逃げてるよ。こっちに近づいてくる。追いかけてるのはふたり」

部屋を飛び出したルーシャの後を慌てて追う。ルーシャは鋭敏な聴力で異変を察知したようだが、パティはどうやら生身でマナを感知する技術――静心応魔を常に使い続けているようだった。

「先生、右の通路。こっちにまっすぐ近づいてくる」

パティの誘導に従って通路を進む。それにしても、静心応魔をここまでものにするとはヴァンも予想していなかった。

そして通路を抜けた部屋で、赤茶けた短めの髪の少女が息を乱して飛び込んできた。そのすぐ後から現れたのは二体の異形の人型生物……妖魔族だ。片方はその弱さで知られるゴブリン、もう片方は黒い全身鎧に身を包んでいるため正体が分からなかった。

「た、助けて！　殺される！」

ヴァンとルーシャは少女を通り過ぎて妖魔族と相対した。
妖魔族の片割れ……金属鎧を全身にまとった男が片言で話しかけてきた。

「むすめ、わたす。いやなら、ころす」
「どっちも無理な相談だ。パティ、練習台にしていいぞ」

ヴァンは手始めに雷球を使った。当然ながら無詠唱である。ヴァンは特別な理由がない限り、呪文は無詠唱で使用する。
妖魔族たちは一緒くたに球状の結界に閉じ込められ、次いで結界内に青白い火花が散り始め、火花はすぐに長く尾を引く雷となって暴れまわった。雷はどんどん数を増していき、やがて内部が何も見えないほどの青白い球体となる。それらが消えるのは唐突だった。
軽装で弓を持っていたゴブリンの方は完全に焼け死んでいたのだが、鎧兜の方は……

「火傷ひとつないだと!?」

皮膚が露出している部分は兜の目の隙間くらいだったが、そこから見える範囲では火傷が見当たらなかった。ありえないはずだった。
金属鎧の重さを思わせない速度でヴァンに肉薄し、斧を振り下ろしてくる。その斧を避けつつ、過剰加重の呪文で体と鎧の重さを激増させてやろうとした。
驚愕した。呪文が完全に無効化されたからだ。

(過剰加重は反発されてもある程度の効果を発揮する呪文……てことは、何か仕掛けがあるな……)

パティの光の矢が着弾しかけたとき、鎧の表面で呪文が空気に溶

けるように霧散するのが見えた。

（全知……魔法がかけられたときに起こる現象、範囲は鎧兜の妖魔）

「知識取得に失敗。何らかの障害が発生。原因不明」

（なに？）

その間にルーシャが鎧兜の背後に回りこみ、関節部分からナイフを刺そうとした。しかし鎧兜は絶え間なく動き続けて狙いを乱しつつ、ルーシャに斧の連撃を返してきた。

距離を取るしかないルーシャ。すると鎧兜は背を向けて遁走に移った。

パティの三本同時の光の矢がその後姿に命中したが、またも完全に鎧で防がれたように見えた。魔法に鎧は効果がないのが普通なのに、だ。これではまるで逆だ。

「ありがとうございます。何とお礼を言ったらよいか……」

「みんなはここに居てくれ。今度は槍でやってみる。すぐ捕まえて戻ってくるさ。まだ身体賦活は有効なままだしな」

礼を言う少女を半ば無視して追撃に移ろうとするヴァンだったが、思いがけず強い力で腕を掴まれた。

掴んでいるのは逃げてきた少女だった。

「助けていただいておいて失礼ではありますが……関わらないでください。今のことは忘れて、速やかにここを出てください」

ヴァンは少女をいきなり抱き上げた。

「変更だ。全員で追う。パティ、マナは感じ取れるか？」

「うん。少しゆっくりになって早足くらいで離れてくよ」

「分岐があったら正しい方向を教えてくれ」
「ちょっと、私の話を聞いて……」
「聞くよ。だが、追いかけながらだ」

すぐに揃って駆け出した。

「あんた、名前は？　ああ、オレはヴァン」
「ライチ……命が懸かってるんです。言うとおりにしてください」
「ライチ、あんた遺跡に住んでるのか？　とてもじゃないが遺跡潜りには見えない格好だ」
「……」

ライチの格好は村娘のそれに近い。ただ、革鎧と小剣で武装している点が違うが、それとてせいぜい護身用。それに――

「マナの量から見て、魔法使いでもなさそうだしな」
「先生、まっすぐ。立ち止まってるよ。なんでだろ？」
「待っているのか？　逃げておいて待つのは十中八九、罠だろうな。近づくのはオレひとりだ。みんなは声の届く距離で待っててくれよ。ライチ、あんた何か知らないか？」
「……」
「黙りか。まあいいさ、聞く相手は他にもいる」

広めの部屋に出た。部屋の奥に鎧兜が見える。ヴァンはライチを降ろす。それから一気に距離を詰めつつワンドを一振りすると、それは二メートル強の槍に変じた。
槍を突き出そうとしたそのとき、壁についていた鎧兜の右腕がわずかに動いた――そこには可動式の取っ手があった。それが何かはすぐに分かった。部屋のほとんど全域の床が勢いをつけて回転しつつ急速に沈み込んで、落とし穴が現れたからだ。

悲鳴を上げるパティとホッグ。部屋に数歩踏み入ったところで待っていたのだ。同じく落下中のルーシャは声を出さずヴァンに視線だけ送った。頷くと落下減速を通常詠唱して全員にかけた。
落ちる速度が緩む。上から悲鳴が聞こえてきた……距離を急速に縮めながら。今度は無詠唱で同じ呪文を、落ちてきたライチにかけた。

「ヴァン！　どうして降りるの？　飛んで戻るんじゃないの？」
「下を見てみろよルーシャ」

かなりの深さ……いや、高さだった。ヴァンたちはもはや遺跡の建造物から出て、広い空間を落ちていた。地下の大空洞だ。それが視認できるのは、まるで昼間の屋外のように明るいからだった。
遥か下には岩で円形に大きく囲われた領域があり、その中にはやはり石造りの多くの建物があった。集落だ。
そしてそこでは今――殺し合いが行われていた。妖魔族らしき無数の群れが攻め込んでいる。対するは人間だが、数は半分以下。

「ヴァン！　どうしてゆっくりなの？　飛んで助けに行かないの？」
「あのな……少しは状況を整理する時間が欲しいんだよ。少しでいいから。なあライチ、あの集落、お前さんのとこかい？」
「……はい」
「この侵攻は初めてじゃないだろう？　戦い慣れてる。倒すためじゃなく死なないための戦い方だ。これまでどうやって退けてきた？」
「……あなたたちには関係ないことですよ？」
「関係ないことに手出し口出しするからおせっかいって言われるんだよ」
「……祖父が敵の統率者を退ければ、兵士たちは逃げていくのが常です」

「……それらしき姿は見えないな。よし、ひとつ戦術級お見舞いしてやるか」

戦術級攻撃呪文とは、戦争で使うのを主眼においた、長射程、広範囲の攻撃呪文を指す。威力も高いが、マナも大量に消耗する。

「限定殺陣……対象は妖魔族のみ……」

ヴァンの詠唱に応えて目標地域が半球状の巨大結界に包まれる。次の瞬間、結界内の地面からは無数の氷の槍と岩石が飛び出し、上からはやはり無数の炎の球と雷が降り注いだ。

それらは正確に人間を避けて妖魔族だけを殺傷していく。この呪文の最大の特徴は範囲内の攻撃する対象を条件によって限定できることにある。その種の戦術級呪文はいくつか存在したが、ヴァンはマナの消費量は大きいものの、四大すべての属性を使って攻撃するこの呪文だけを習得していた。

サファイアがまたひとつ灰になった。呪文が収まると残るのはほぼ人間だけ……のはずだったのだが――

平然と動いている黒い影が複数あった。

「く！　同じ鎧か……しかし、戦術級まで無効化するのか？」

巻き込んだ敵は百体強、そのうち二十六体もが何事もなかったかのように戦いを続行している。その身を覆っているのは見覚えのあり過ぎる黒い全身鎧……。

「……まずいな。雑魚を一掃したら鎧の連中が動きやすくなったらしい。オレはこれから連中のど真ん中に飛ぶ。一緒に来るのは誰だ？」

ルーシャとパティが行くと言い出すと、ホッグとライチも続けて名乗り出た。

「ライチとホッグとパティはひと塊でいること。パティは直視できない強い明かりを一瞬だけ灯して敵の視界を奪うことだけしてくれ。ときどきでいい。みんなパティのいる方は向くなよ！　ホッグはライチの護衛。パティを狙ってきたら放っておけ。守護獣が出てかえって有利になる」

「へい！」

「はい！」

「ルーシャはオレの近くから離れないこと」

「あんたと違って、あたしならあいつらと戦えると思うけど？」

「じゃあなおさら一緒だ。オレの背中を守ってくれ」

「ま、いっか」

瞬間転移した先は当然村の広場。鎧姿の割合が増えてしまったところだった。

二・ありがと

怒号、剣戟、咆哮、断末魔……

広場は謎の支援攻撃を受けて後、かえって戦況が悪化していた。

「後退、後退〜！　鎧は相手にするな！」

「ちっ！　魔法使いは散って周囲の応援に向かえ！」

犠牲者が少ないのは幸いだった。敵の絶対数が減ったことは必ずしも悪い方だけに働いてはいない。だが、時間の経過と共に悪化していくのは確実だった。

「偵察兵！　敵の大将はまだ見つからんのか！？」

「まだ大きな動きを起こしていない。鎧の中に紛れているはずだが判別には時間がかかりそうだ！」

「急いでくれ！　ムゼッカ様が動いてくださらねば被害はいたずらに拡大する」

「報告！　いつの間にか戦場に入り込んでいた正体不明の四人組が援護を始めている！　そして理由は分からないが、ライチ様が一緒におられる！」

「ご無事だったか！　しかし、援護とはどういうことだ？」

＊＊＊

転移した位置が絶妙過ぎて、誰ひとりそこから動く必要がなかった。敵の注目を一斉に浴びたからだ。そして戦術級呪文を炸裂させた中心に、黒の鎧姿ばかりが集まってくる。

「ホッグ、あんたの二本の剣の片方をオレにくれないか？　試した

いことがあるんだ」
「え？　は、はあ。いいですけど」
「そんじゃ、くれる方を構えてくれ。呪文をかける」
ホッグが予備の方の長剣を構えると、ヴァンは珍しいことに三秒もかけて何かの呪文を通常詠唱した。
「実験が成功ならそいつは一撃限りの大打撃を与える武器になってる。大振りでも何でもいいから頭か胴体に当ててくれ」
ルーシャが口を挟む。
「何それ？　あたしのナイフにもかけてよ」
「一撃で壊れるぞ？　それに実験に使うには小さすぎるしな」
「……何の実験なのよ」
「パティ、いいって言うまで明かりは待ってくれ」
「はい！」
それ以上、話している余裕はなかった。総勢二十以上の全身鎧の妖魔族が押し寄せてきたからだ。体格が明らかに違う者も混ざっている。
ヴァンは槍を構えて待った。全知で敵味方の現在位置を脳裏に描き続けるつもりだったのだが、把握できるのは味方だけだった。静心応魔に切り替える。こちらは正常に感知できた。ホッグより前にヴァンが乱戦に入った。
眼の前に来たのは二体の大柄な妖魔族で、ひとりは斧、ひとりは両手剣を持っている。全知で種類を調べる試みはやはり失敗した。
斧の方を突きで牽制すると、それを好機と見て剣が槍の柄を全力で叩き落としに来た。槍を一回転させて剣を避けるついでに手首関節の隙間を狙う。

普段なら無茶な試みだったが、闇商人と戦うために解放した最上級身体賦活の呪文が、極めて精密で力強い攻撃を可能にした。利き腕の関節を破壊されて剣が後退する。
同時にホッグの間合いに鎧が入った。ヴァンは自分とルーシャをかすかに光る結界で保護して、ホッグたちの様子を観察した。

「はふっ！」

独特の呼気と共にホッグは剣を横に振るった。鎧を過信した敵は弱そうなホッグの攻撃など目に入らないと言わんばかりに、自らの大槌を振りかぶった。
鎧の脇腹に剣が命中し――あっさり折れた。
誰もが驚いた。ただひとり冷静なヴァンを除いて。半呼吸ほど間を置いて、折れた剣先が小さく爆ぜた。粉々になっている。同時に鎧の脇腹が巨人の一撃でも受けたかのように派手にひしゃげ、着用者も弾き飛ばされた。生きているとはとても思えない威力だった。

「な、な、な……」

言葉にならないホッグ。当然と言える反応だが――

「ホッグ、剣を交換しな。うまくいった。ありがとよ」

斧がヴァンの結界を二度、斬りつけた。ヴァンは向き直って結界を解除しようとしたが、その必要はなかった。
斧の妖魔が、体当たりで鎧を結界に当て、消してしまったからだ。

「む、気づくのが早いな。頭回るぞこいつら」

ヴァンはそのままの勢いで突っ込んでくる黒い鎧を、受け止める

ふりをして相手の力を誘導し、地面に頭から挨拶させた。ルーシャがその鎧の隙間から頭部を刺し、即座に絶命させた。
だが好調なのもここまでだった。
ヴァンの槍もルーシャのナイフも、今の戦いを見て警戒しだした敵の隙を突くことができなくなり、増援が増えていく中で体力だけをいたずらに磨耗させられ始めた。
ホッグは元よりさほど戦闘力が高くない上に警戒までされて、剣を叩かれて取り落としそうになっていた。

「パティ、頼む！」

炸裂する一瞬の強烈な光。
明かりの呪文……閃光と呼ぶにふさわしい効果が最も役に立った。鎧姿は一様に目を瞑り、その隙をついて劣勢を覆すべく武器が踊り、三体の妖魔族が地に伏した。
しかしそれさえも対策を立てられる。パティが呪文を唱え始めると同時に俯き加減になり、直視しない戦法を取られたのだ。
パティを最重要標的と認識した長槍の鎧姿が、踏み出して武器を突き出した。しかしそれはパティに届かず、突如現れた金属質の獣の胴で滑り、獣は槍をまず噛み砕いてから持ち主に踊りかかった。ヴァンがパティを護らせるために造った守護獣だった。
白銀の狼を模した魔法生物は得難い増援だったが、劣勢を覆すほどのものでもない。

ヴァンは頃合いを計っていた……瞬間転移による逃げだ。敵を倒すのにかかる時間は増える一方、その倍の速度で疲労も蓄積していく。転移のために全員の居場所を確認したそのときだった――

「先生！　あそこ！」

パティが集落の広場を抜けたあたりを指した。妖魔族の侵攻はそこまで及んでいて、次々と牽制を放ってから逃げていく男たちの中……ひとりの痩せた初老の男が、鎧兜の顔からナイフを引き抜いていた。倒れる鎧姿。

見ればその男の移動したと思われる場所に、倒れている鎧がもうふたつあった。

「ムゼッカ様！」

若者のひとりがそう呼びかけて鎧姿の一体を指していた。その男――ムゼッカは白髪混じりの茶色の短髪を掻きつつ、悠然たる足取りで示された敵に歩み寄った。

ヴァンは仲間と守護獣に落下減速をかけてから、四十メートルほど上空へ瞬間転移させた。敵も味方ももはや戦いを止めて、ムゼッカとその相手の一挙手一投足に注意を集中していた。

特等席で見せてもらうつもりだった。

「お前さんが今日の大将か」

ムゼッカは問いかけるでもなくそう言うと、一歩だけ深く踏み込んだ。次の瞬間、信じられない急加速をして大将に肉薄していた。両の手のナイフが閃き、無造作にも思えるその斬撃が鎧を傷つけ始めた。

その速さは尋常ではなかった。腕が六本あるようにすら見えるほどの連続攻撃。だが、いかんせんその攻撃は軽く、鎧の表面に傷を増やしているだけに見えた。

大将は間合いを空けて連接棍を振り回そうとしていたが、ムゼッカは影のように付き纏い、至近の間合いを外させなかった。その間

も攻撃の手は少しも緩まない。あくまで鎧の表面に留まっていたが、傷が見る間に増えていった。
妖魔の大将は苦し紛れに足を振り上げるが、その蹴り足を取って振り上げを手伝うと、鎧姿が宙を舞った。全身鎧を着込んでいるとは思えぬ体捌きで宙返りをして足から着地した大将、だが着地の硬直を狙い、心臓の真上からナイフを深々と刺された。
幻惑の乱撃の最中、その場所だけ繰り返し斬りつけて、穴を開けていたのだ。血の跡を引いて抜かれるナイフ、倒れる鎧姿、湧き上がる歓声。
戦いはたったこれだけのやり取りで終わってしまった。
大将が敗れたと知るや、妖魔の軍勢は粛々と退却していった。

ヴァンは絶句していた。横目でルーシャを見やる。

「……見てた」

ルーシャの短い拗ねたような反応にもすぐに言葉が出ない。

「……あれはヘインなみじゃねえのか？」

ヘインとはパティを売り飛ばそうとしていた山賊の首領だった男で、人間の限界を超えた戦士だった。ヴァンが辛くも心臓凍結の呪文で仕留めたが、それとて幾つもの偶然が呼んだ奇跡に近い。

「ヘインさんを知ってるんですか？」
「ライチ……知り合い、なのか？」
「祖父から名前だけ。しきりに、いつか殺すと。でもとても懐かしそうに」

ライチは微笑んでいた。

「ご覧になったあの人が、祖父のムゼッカです」

「パティ、ちゃんと見てたか？」

「うん。先生、あれは何ていう魔法なの？」

これに驚いたのはルーシャとホッグだった。ルーシャは反論した。

「魔法なんて使わなかったでしょ？　あの人、ずっとナイフだけで戦ってた」

「使ってたんだよ。マナが活性化や移動を目まぐるしく繰り返していた。たぶん魔術だろうな。そんな風にマナを扱うのは他の系統の魔法にない特徴だ……しかし解せないことがひとつある」

ヴァンはまたも視線を下に落とした。ゆっくり落下していたが、もう高さは二十メートル強ほどになっていた。そして、下から見上げる人々の注目も浴びていた。

「あたし分かったよ。あの人、魔法使ってるのにマナが少しも減らなかったよね？」

「それだ。詳しく聞かせて欲しいところだが……」

ライチに目を向ける。その意図は容易に読めたので彼女は答えた。

「命を助けていただきましたし、紹介くらいはしますよ」

「ありがとさん」

ヴァンは呪文を制御して落下速度を早め、地上が近づいてからまた減速して着地した。

＊＊＊

犠牲者を悼む泣き声、慰めの言葉、運ばれていく遺体……。
ヴァンは居心地の悪さを感じたが、今はそれどころではなかった。
あのムゼッカとか言う達人と一刻も早く話をしたかった。

「ライチ、無事だったんだな！」
「ライチ様、その人たちは？」

思惑は外れ、たちまち人だかりに囲まれてしまった。

「ご心配をおかけしました。敵に追われていたところを、この方々に助けていただいたんです」
「それにしたって他所者を連れてくるとは……」

非難がましい声も上がった。ヴァンがそれに答える。

「オレたちはライチを追いかけてた奴の罠でここに落とされたんだ。責めるべきはライチじゃない」
「あんたが隊長か？　名前は？」
「まあ、この四人を隊と呼ぶならそんなところかな。ヴァン・ディールだ」
「ディール、来てくれ。長老からお言葉がある」
（お言葉、ね……）

他の四人もついて来ようとしたが――

「ライチ様はムゼッカ様の元へ。安心させて差し上げてください」
「長老のところにいるって伝えてくれればいいだけでしょ」
「長老はそれをお望みではありません」

ヴァンは予想通りの言葉にうんざりしてきた。

「サムソン様ね？　なおさらあたしが行かないと。止めても無駄。力づくっていうならこの獣が暴れ出すけどいいの？」

パティの守護獣を指す。無論、そんなものライチの出任せなのだが、信じる根拠も疑う根拠もなくては判断のしようもなかった。反応に満足すると、ヴァンを促して歩き始めた。

「あんた、かなりのおせっかい焼きだろう？」

「あなたに言われたくはないかな、ディールさん」

「ヴァンでいい。家名で呼ばれるのは苦手なんだ」

集落の人々は道を開けた。途中、パティがヴァンに声をかけた。

「先生、この子いつまで出たままなの？」

「ああ、守護獣のしまい方を教えてなかったな。しばし休め、我が盾よ。これが合言葉だ」

パティが復唱すると白銀の狼は光になって腕輪の真珠に吸い込まれた。パティは真珠を撫でながら呟いた。

「守ってくれて、ありがと」

三・待ってる

長老の家とやらは集落の最奥にあった。いや、正確には最奥の手前というべきか……というのも、さらに先には小高い岩山があり、その中へ通じる洞窟が大あくびをしたときのように口を開けているからだ。

ライチの後から長老の家に入ると、白髪の老人三人が炎の近くの敷物に座っていた。暖炉ではなく、部屋の中央の石床が軽く掘られていて、そこに火をくべてあるのだ。燃料の木の種類のせいか、煙が出たり激しく燃えたりはしていない。そして良い薫りが部屋中に広がっていた。香木なのだろうが、ヴァンの知識にはないものだった。

まず口を開いたのは、目付きの鋭い伸び放題の髭の老爺だった。

「ライチ、ここへは来ぬよう伝えさせたはずだが？」
「そう言われたらなおさら来ないわけにはいきません」
「サムソンよ、ライチより客人と話をしたいのじゃがよいかな？」
「何ゆえわざわざ伺いを立てる？　好きにすればよいアベル」

アベルと呼ばれた温厚そうな老爺は、編みこんだ灰色の髭を触るのをやめて声をかけた。

「客人よ、座っておくれ。地上と違って椅子がないので、敷物の上じゃがの」

老魔術師は言いながら杖を振り、部屋の片隅に折り畳まれていた敷物が五つ、浮遊して石床の上に敷かれた。大人しく従う。

「勝手に名乗らせてもらう。オレはヴァン、こっちがルーシャでこ

いつがホッグ、最後がパティだ」
「礼儀正しい若者じゃのう。儂はアベルじゃ」
「私はキ・ハ。キーハの方が呼びやすいからそう呼ぶ人が多いわ」
左に座っているのがキ・ハ、目尻の垂れた人が良さそうな老婆だった。植物や石を使った独特の装飾品を身に着けている。
「こっちの無愛想はサムソンよ」
「頼んどらんぞ、キ・ハ」
痺れを切らしてヴァンは尋ねた。
「話があると言われて来た。その話とやらを聞きたい」
答えたのはアベルではなく、またもサムソンだった。
「魔術師はお前だな？」
「そうだ」
「派手にやってくれたらしいな。おかげで四人死んだ。何か言うことは？」
「サムソン、責任のすべてが彼らにあるような言い方をするでない」
「黙れアベル。今喋っているのは儂じゃ」
「あたしが代わりに話すわ。あなたじゃこじらせるばかり」
「頼んどらんぞ」
「では儂が頼もう。キーハ、話してくれ」
「ありがとうアベル。さて……」
キーハは温厚な笑みのまま続けた。
「大規模な魔術を使ったそうですね。知らなかったでしょうが、敵

の中には魔法が通じない者たちがいて、弱い兵が死に、その精鋭だけが残ったのです。突然、敵の前面が強いものだけになってしまったことに対処しきれなくて、聞いての通り、被害者が出ました」
「知らないこととはいえ、すまなかった」
「素直ではないですか。責めるのはやめにしましょう」
「待って」

口を挟んだのはライチである。

「キーハ様、ヴァンたちは善意で私たちの加勢をしてくれたんですよ？　非難ではなく、お礼を言うのが筋ではないでしょうか？」
「そうですね。ですが、戦況が悪い方へ傾いたのは事実。指摘しなければ遺族は恨みに思うことでしょう」
「ライチ、いいんだ。押しつけの善意で状況を悪化させたのは確かなんだ。ことを荒立てるつもりもない。咎められるなら甘んじて受ける。ただ……」

ヴァンは長老たちを見回した。

「ここに留まらせてもらいたい。同じ間違いはしないし、力を貸せることもある。せめてもの詫びをしたい」

完全に本心とは言い切れなかったが、偽ったわけでもなかった。と、そこへ初めて聞く声が響いた。

「ライチ！　心配したぞ。助けてもらったそうだな？」

達人、ムゼッカであった。気配が感じられなかったので、ヴァンは少なからず動揺していた。

「ヴァン・ディールにルーシャにホッグにパティだったな。礼を言うぜ。ここに留まりたいってんならオレが面倒見るから安心しな」
「ムゼッカ！　お前にそのような権限があると思ってか！　思い上がりもはなはだしいぞ！」
「サムソン、オレは隠れ里の英雄様だぜ？　それにあんたらに任せてたら、朝までかかるだろ」
「決まりね。あまり気は休まらないだろうけど、納得がいくまで逗留するといいわ」
「すまん」
「違うわ。そういうときは、ありがとう、と言うものよ」
「……ありがとう」

苦手な言葉を紡ぎだすと、キ・ハは柔和な笑みで頷いた。

＊＊＊

ムゼッカとライチの家は、村の広場と長老たちの家の中間にあった。他の家々と同じく石造りの素朴な建物だ。家の中はあまりに整頓されていて、まるでいつ引き払ってもいいようにしているようだと、ヴァンは感じた。

「んで、ここが客間だ。一応ふたつ作っておいてよかったぜ。それから手製の寝台。信じられるか？　ここの奴らは寝台も使わねえんだ。床に座るのは疲れるから、話をするときは寝台に腰掛けてしようぜ」

ムゼッカに促されるままに寝台に腰掛けた。あまり柔らかくはなかったが、座るにはかえって好都合だった。ヴァンが問いを投げる。

「ムゼッカさんも地上の生まれなんですね？」

「そういうこった。迷い込んだらなんか戦争してるから、手を貸したら英雄に祀り上げられちまってな。以来、ここが我が家だ」
「ねえお爺ちゃん、この人たち、ヘインさんを知ってるんだって」
「本当か？　あいつ今何してんだ？　どこにいる？」

ライチが口を挟んだことで、話題にしたくなかったことを語らざるを得なくなり、ヴァンは頭を痛めた。

「山賊の頭領をしていました。ニーズの街の東側で。ええと……隠してもしょうがないので言ってしまいます。オレが……殺しました」
「……本当、なんだな？」
「……はい」

空気が重くなるのを感じた。ヴァンはムゼッカと真正面から見つめ合っていた。目を逸らすのは失礼に当たると思いつつも、本心では視線を外したくて仕方なかった。ムゼッカの表情から感情は読み取れない。
と、思っていると、不意に破顔した。

「か～～～！　こんの野郎！　あいつはオレが殺すはずだったのによぉ！　畜生、老い先短い年寄りの楽しみかっさらいやがって！」

笑っていた。他の全員が唖然とする中で、ひとり笑いながら楽しそうに悪態をつくムゼッカ。一番先に適応したのはルーシャだった。ムゼッカに気楽な調子で尋ねる。

「ねえ、ヘインとはどういう知り合いだったの？」
「あいつかぁ？　いけすかねえ奴だったぜ。まあ、昔馴染みの仲間ってことにしといてやるが。いつも澄ました面しやがってよぉ、それがまた年頃の娘たちには受けがいいんだから憎たらしいだろぉ？」

ひとしきり笑うと、ムゼッカは気にするなという素振りでヴァンに話しかけた。

「よく殺せたもんだ。大した奴だなおめえは。ますます気に入ったぜ。困った事があったら何でも言いな。言うだけならただだからな！」

「ありがとう……ございます」

「畏まるなよヴァン、オレにそんな大げさな言葉遣いすんな。呼び方もムゼッカとか爺さんとかで構わねえよ」

「あの、ムゼッカさ……ムゼッカ、聞きたいことが……」

「おう、何でも聞きな」

「あなたの戦いを見てました」

「見てたな、空の上から」

「あの技……あの魔術は、誰に学んだんですか？」

「アベルの爺いと同じこと言いやがる。あれのどこが魔術なんだ？呪文のひとつも唱えてねえんだがよ」

「呪文を使うのに必ずしも詠唱は必要じゃありません。無詠唱という技術があります……けど、あなたの技術は恐らくそのさらに先の……」

「わーったわーった。あの技はな、自分で編み出した。十何年かけてな」

「自分で……？」

「最初は気休めくらいの効果しかなかったが、工夫してる内にどんどんいい感じになってった。ヴァン、オレの手を握ってみな」

「？」

不可解ながらも差し出された右手を握り締める。

「弱いだろ？」

「え？」
「オレは今、力の限り握り返してるんだ。笑っちまうくらい弱いだろう？」
「……どうして？」
「体質って奴だ。生まれつき手足の指の力が弱い。赤ん坊より少しましって程度だ。こんな奴がある日、女友達に誘われました。ねえ、わたし遺跡潜りになることに決めたの。あなたもなってくれるでしょ？　と来た！」
「……薬や魔法は？」
「飲んだ薬は数えきれないほど、回った神殿は実に三桁。同じ数だけ侘びの言葉を聞いた……いや、そんなことはねえか。でまあ、こんなオレにも遺跡潜りとしてできることを探したわけだ。手先が器用だからって業師の技を学ぶことにした。ところが戦闘術が含まれてたんだなあ。どんな腕利きも匙を投げたぜ。話にならんってな。何しろ短剣ひとつまともに持ってられねえんだ。だから、自力で鍛えるしかなかったんだよ」

片手をおずおずと上げてパティが口を挟んだ。

「あの……業師ってなに？」
「遺跡潜りは分かるな？　遺跡潜りにひとりは必要って言われる、いろんな技術に通じた多技能者のことだ。鍵や罠の対処から偵察、軽業、隠密行動なんでもありだ。口の悪い奴は盗賊なんて呼びやがる」
「お爺ちゃん、あたしご飯にするけど、皆さんもう疲れちゃったんじゃない？　休んでもらったら？」
「おお、そうだな。じゃあ続きを聞きたけりゃまた今度、だ。飯ができたら教える。オレもちょっと横になってくらぁ」
「ごめんね、年寄りは話が長いから……ご飯、作ってくるね」

ふたりが部屋を出た。ヴァンとルーシャはそれぞれ深刻そうな顔をしている。やがてヴァンが口を開いた。

「ホッグ、パティに読み書きの練習をさせててくれないか？　少しルーシャと話したいんだ」

「へい！」

パティは心配そうな表情を投げかけてから扉を閉めた。

「ルーシャ……」

「ヴァン、あたしに指図しないで」

「そんなつもりは……」

「いくら言い方を柔らかくしても、自分の意見を押しつけたらそれは指図でしかない」

「……順序よく行こうぜ。あの爺さん、どう思った？」

「だらしなさそう。女に」

「そういうことを聞きたいんじゃないんだ」

「分かってる……あの戦い方は、あたしにすごく合ってる。あたしも力はない。業師の戦闘術で補うのも限界を感じてた。あの技……魔術だっけ？　すごく欲しい」

「そうか。だったら――」

「けどね、あたしも自分で編み出したい。へなちょこでもいいから、何年かかってもいいから、誰かに教わるんじゃなくて、自分で……」

「ルーシャ……気づいてるか？　敵が強くなっていることに」

「え？」

「この世界についてからだけでも、レンダル、ヘイン、ビダー配下の手練たち……お前の手に負えない奴らばかりだった。空を飛んでた偽竜は論外だが……世界を渡るたびに、敵がどんどん強くなってるんだよ」

「……待てないって言いたいの？」

「世界が待ってくれない。時間かけてる余裕なんかないんだ。このままじゃ近いうちに……お前はオレの足手まといになる」
「そう。それならヴァン……あなたひとりで世界渡りを続ければいいじゃない」
「無理を言うな。いつかの異界学者が言ってたろう、オレたちはふたり揃ってるから確定世界だけを渡っていけるって。ひとりで渡ったら不確定世界に飛ぶ危険が高い」
「危険だから嫌なの？　あたしね、もう疲れたの。誰か他のパートナーでも探せば――」
「お前じゃなきゃ駄目なんだ！　仮に他の誰かでも確定世界行きの世界渡りが可能だったとしても、オレはお前と一緒がいい。一緒に……帰りたいんだよ……」
「……なにそれ。うまく口説いたと思ってる？」
「……」
「結論は少し先でいい？　なんかすごくむしゃくしゃしてるの。今すぐいい返事はできそうにない」
「……分かった。待ってる……」

一・飲もうぜ

ヴァンは隣の客間の扉を開こうとして、取っ手に手をかけた状態でしばらく待ってみた。ホッグとパティの話し声が聞こえる。

「この三行の中に綴りの間違いが四つあるよ。当ててみて」
「えーと……あ、ひとつ見つけた。こうでしょ？」
「正解。あと三つだよ」
「うーん……」

普段のホッグからは想像できないその話しぶりに苦笑を浮かべながら、扉を開いた。

「あ、先生！　お話もう終わり？」
「ああ。どうだ、勉強の方は？」
「ホッグさんすごく教えるの上手だよ」

ここでパティは声を落として続ける。

「ルーシャさんより分かりやすいもん」
「へぇ。意外な特技があるもんだな」
「おいらも知りやせんでした……えへへ」
「ルーシャは少し落ち着いて考え事をしたいらしいから、パティはもうちょっとここで文字の練習な」
「分かった……せ、先生……それ、何？」

パティの驚きにホッグが同じ方向を見て、言葉を失った。

「ああ、こいつはただの切り出した岩だ。これを材料に今から武器

を造る」
「武器……でやすか？　ひょっとして、あの実験の？」
「そうだ。実験の結果を元に造るんだ」

一メートル半ほどの直方体に切り出された岩が、浮いたままヴァンの後から部屋に入ってきたのだった。

「考えたんだが、やはり石が一番いいと思った。あの実験で試したのは、魔法によって誘発した魔力を伴わない破壊力が、あの鎧に通じるかってことだった。結果は見たとおりだ」

岩塊に呪文をかけ、縦半分に割く。

「ニーズの街の総督から借りた崩壊の魔剣の作用も参考にした。攻撃したついでにマナを送り込むと、先端から崩壊の魔力が放出されて魔力による破壊を撒き散らすってものだった」
「でも先生、あの鎧には魔力通じないでしょ？」
「ああ。だから、あえて魔力を伴わない破壊力にしたんだ。ほとんど知られていないことだが、物ってのは壊れるときにある種の力を発生させる。この力が魔力を伴わない破壊力として使える」

喋りながら特別な印のついた水袋を取り出し、中に入っているたくさんの小袋から必要なものを選んで、卓の上に置く。

「武器が命中したときにわざと折れた部分を粉砕し、そこで発生した力を魔力で操作して一点に集め、命中箇所から敵に送り込む。あくまで魔力は敵に接触させずに、力を集めてその向きを揃え、適切な場所で解放するだけ。これならあの、魔法を無効化する鎧を着ている敵にも有効な打撃を与えられるわけだ」
「するってと旦那、やっぱり武器は一回しか使えないんで？」

「いや、これから造る石の剣には形状再生の魔力も込める。壊れてもすぐ元に戻るようにするんだ。それでも少しずつ材質が減っていくわけだから、三十回ってとこかな？　ま、十分だろ。他にも細工をするから完成まで時間がかかるはずだ。そろそろ飯に呼ばれるかも知れないが、オレは武器に集中したいから後で食わせてもらう」

控えめに扉が叩かれた。ライチの声が聞こえてくる。

「夕食できましたよ。ヴァンさんは本当に熱々を食べなくていいんですね？」

「立ち聞きか？　猫舌だからちょうどいいや。そうだ、ホッグ、パティ、食事の間にいろいろと話を聞いておいてくれ。この隠れ里についてと、敵対してる妖魔族について、思いつく限り頼む」

「うん」

「へい」

ふたりが部屋を出ていくと、ヴァンは武器造りに没頭し始めた。

＊＊＊

「来た来た。んん？　ヴァンはどうした？」

「今、武器を造ってるところでやす」

「すごい武器だよ！」

「武器だぁ？　あいつは副業に鍛冶師でもしてんのか？」

「魔法で造ってるの」

「ほぉ。便利なもんだなあ。ま、そういうことなら食おうぜ」

ライチの料理はなかなかのものだった。鶏肉と野菜をふんだんに使った煮込みが主菜で、副菜には果実と野菜の和え物、それに根菜を炒めて味付けした物など、地底とはおよそ思えない品々ばかりだ

った。

「お爺ちゃんが地上の料理しか食べたくないって言うから、目新しい物はないかも知れないけど……ちゃんとできてる？」
「地上でもなかなか食えないっすよ、ここまで美味いのは！」
「うん。すごく美味しいよね！」
「悔しいけど、野菜たっぷりであたしの好みにぴったり。その上こんなに絶妙に味付けされてたら、ねぇ……」
「そうだろうそうだろう、オレの密かでも何でもない自慢なんだ！
戦争してなかったら店だって出せるぞ。そう思わねえか？」
「お爺ちゃん、大げさだってば。褒めていただいて恐縮です。たくさん作ったんでどんどん食べてくださいね」
「あのね、先生が、いろいろお話をしなさいって」
「話ぃ？　なんの？」
「忘れてやした！　この集落について、それと敵の妖魔族について詳しく聞いておくよう言われたんでやす！」
「そういうことならもう少し待ってくれや。アベルの爺いを呼んどいたから、そのうち来るはずだ」
「もう来ておるよ、ムゼッカ」

入口の方から杖をついたアベルが入ってきた。

「この爺い、また気配殺しの魔法使ってやがったな？」
「お主を驚かすのが儂の数少ない楽しみじゃてな」

人の悪い台詞を吐きながら人の良さそうな笑みを見せるアベル。誰に断るでもなく輪に加わりあぐらをかいた。ライチが新しい客に料理を盛って渡す。

「ライチの料理は儂のもうひとつの楽しみじゃ。食べながら失礼す

るぞよ。ときにムゼッカ、地上には椅子というものがあるじゃろう？　なぜ食事をする部屋に卓と椅子を置かぬのじゃ？」
「家を作ったとき手伝ってくれた若い衆が、やれ椅子が分からんだの変な物を作らせるなだのと駄々をこねたんだよ。それより早速、本題に入ろうぜ」
「そうじゃな。まずはこの隠れ里のことからじゃったのう。隠れ里、単にそう呼んでおる。人が住み始めたきっかけは、百年以上前に滅ぼされたある国の難民たちが、ここを偶然発見したことからじゃ。難民の間にだけ広まった噂がここに人を呼んだのじゃな」
「妖魔族はその頃からいたの？」
「おったようじゃ。じゃが、争いがいつ始まったのか……最初から敵対関係で始まったのか、友好関係から逆転したのかまでは伝わっておらん」
「……ヴァンなら全知でそのあたり調べられるかも」
「ほう、あの若者は全知の使い手か。珍しいのう。あの呪文を覚えるとは」
「珍しいの？」
「そうじゃよ、小さな魔女のお嬢さん。全知は一回使うだけで大量のマナを使ううえ、的確な方法で問いかけねばならぬ。扱いづらいので、よほどマナに余裕があり、物事を調べることを重視するような魔術師だけじゃろうの、覚えるのは」
「だったらヴァンは珍獣の中の珍獣ね。全知を固定化してるんだから」
「固定化じゃと？　あの難度の呪文を固定化するのに、どれだけのマナを集める必要があることか……。何年がかりでの準備が必要になるじゃろうに……」
「半年くらいって言ってたかな？　月光からマナを吸収する薬を簡単に増やす方法を見つけて、それでかなり楽をしたみたい」
「アベル、内容はいまいち分からねえが、話がだいぶ逸れてるんじゃねえか？」

「おお、確かにそうじゃ。隠れ里には十数年前の戦争でも亡命者が流れてきて人が増えたんじゃ。もしそれがなかったら、本格的に攻め始めた妖魔族に簡単に滅ぼされておったかもしれんのう」
「本格的に、でやすか？　てことは、前から小競り合いはあって、それがあるときから大規模な衝突になっていったということでやすか？」
「左様。小競り合いだった頃は、たまに人死にが出ることもある、という程度じゃったのが……敵が必ず二体以上で行動するようになって変わった。今から二十年と少し前のことじゃ。出会ったときにこちらの人数が妖魔の数以下の場合に限り、必ず戦いになるのじゃ。そして、戦いになったら八割方、ひとりは殺された」
「何かきっかけがあったの？」
「さてのう……妖魔に狡猾な策士が現れたという噂があるにはある。真偽はともかく、変化の後、連中は徐々に軍隊じみた動きをするようになったんじゃ。儂らも同じように対処することにして、今に至るわけじゃが」
「気づいたか知らねえが、この隠れ里の男は例外なく戦いの訓練を受けているんだ。戦士、偵察兵、魔法使いのいずれかを幼い頃から叩き込まれるんだぜ？　ちょっとまともじゃねえだろ」
「仕方なかろう。規律の徹底、指揮系統の組み立て、個人の戦闘技術から集団戦の定石……儂もあれこれ口を出し、より優れた戦闘集団を作ろうとした……儂は引退前は魔法使い陣の指揮官をしておった。六十で引退すると今度は長老をやるはめになったんじゃ」
「アベル様が長老にいるからサムソン様の横暴を抑えられているんですよ。キ・ハ様だけではたぶん止められないでしょう」
「あれものう……昔は戦士団の団長として広く信頼を寄せられておったのじゃが、長老の資質が本当にあったかは怪しいのう」
「えっと、先生が、死なないための戦い方って言ってたけど、あたしよく分からなくて……」
「そこまで見えておるか。どの兵種でも同じじゃが、最優先で学ば

せるのは相手を倒す術などではない。身を守り、必要とあらば安全に逃げる方法に重点を置いておる」
「妖魔族の数が読めねえからなぁ。勝つことはとっくに諦めてんだろ？　だからひたすら守りに入って、攻め込まれるたびにオレを頼るってわけだ。こんなとこで英雄様になっても、いいことなんざ何もねえんだぜ？」
「あるわよ。いろんな人から魚とか地上の食材とかもらってるんだから」
「英雄様への豪勢な貢物ってわけだ！　何かといえば魚だよ魚！　オレは小骨のある魚は大嫌ぇだっつーのに」
「すいやせん、話を戻しても構いやせんでしょうか？」
「おっと悪りぃ、そういうときは直に言っちまっていいぜ」
「へい。敵の狙いは分かってるんでやすか？」
「どうなんだ、アベル？」
「これは推測じゃが、最終的な目的は隠れ里を滅ぼすことじゃろうな。もっと近い狙いなら明確に分かっておる。ムゼッカを殺すこと、ライチを攫うこと、この二点じゃ」
「どうだ？　だいたい出尽くしたって感じなんじゃねえか？」
「うん」
「そうでやすね、おいらはもう思いつきやせん」
「待って。大事なこと忘れてるでしょ。あの黒い鎧って何なの？　魔法を全部防いじゃうわけ？　そんな技術、あるの？」
「あるのじゃよ。裏切り者の鎧……サムソンはそう呼んでおる。あれを造っておるのは、元は隠れ里にいた職人じゃ」
「に、人間なんでやすか？」
「そうじゃ。彼は自分の意志で里を離れ、妖魔族についた。そこに至るまでは到底、語りきれぬ。大まかに説明すると、捕虜となった敵の女を愛してしまったのじゃ。思いは通じ合い、いつしか虜囚の娘も彼を愛するようになった」
「あたし、なんとなく読めてきちゃった。利用したんでしょ？」

「そうじゃ。サムソンとその支持者が中心じゃったが、見逃した者も、協力した者もおった。彼らは敵に交渉を申し込んだ。娘と引き換えに十分な量の鉄を要求した。もちろん敵は疑ったが、最終的には受け入れたようじゃった」

アベルは目が醒めるような匂いの香草茶をひと口含み、しばらく味と香りを楽しんでから喉に落とした。

「その交換の場で、サムソンらは敵の交渉団に範囲魔法の一斉攻撃を仕掛けたのじゃ、解放した娘も巻き込んでの。関わった術師は十五人ほど。攻撃に巻き込まれて生き残ったのは当然ながら、交渉団を率いていたひとりだけじゃった。怒りに任せて強力な黒魔法により八名の命を奪うと、そのまま消えたそうじゃ」

「……ひどい話……」

「それからじゃ。愛する者を失った男は戦利品の鉄を使って鎧を作り始めてのう。試行錯誤を重ねて完成したのが裏切り者の鎧。最初の完成品を身につけて彼は妖魔族の元へ走った……後は想像するしかないのじゃが、有用性を認められ、その元で鎧を作り続けておるのじゃろう。二年ほど前の話じゃよ」

「ふぁ～あ。簡単にとか言っといて相っ変わらず話が長げえなあ。オレがひと言で結論をつけてやろう。それから鎧を着用した精鋭が増えていって魔法使いはほとんど何もできなくなっていき、そのしわ寄せが全部オレに集中しましたとさ。どうだ？　もう十分だろ？」

「う、うん……」

「おいらも、思いつくことはありやせん」

「んじゃ、食後の楽しみにしようか」

ムゼッカがライチに合図すると、彼女は酒の壺を持ってきた。アベルが苦笑する。

「やれやれ、日没前の飲酒は禁じられておるというのに……」
「いいじゃねえか。こいつらは客人だし、オレは英雄様だ。で、ライチは料理の女神様だ。問題あんのは爺いだけ。てなわけで、飲もうぜ」

二・遅かったな

食後の酒を酌み交わしていると、部屋にヴァンが入ってきた。ヴァンはアベルの姿を見つけ、軽く驚いた。

「アベル師もおいでだったんですね。ちょうどよかった、尋ねたいことがあったんです」

「儂も実はお主に会いに来たのじゃよ、ヴァン。いろいろと聞きたいことがあってのう」

「遅かったじゃねえか。もうみんな食い終わっちまったぜ？　座れよヴァン」

「大丈夫ですよ。ヴァンさんの分はちゃんと熱々のまま取っておきましたから」

「え？　いや……冷めていた方がありがたかったんだが……」

「そんなこと言いますか？　じゃあ、お水で薄めてあげます！」

慌てるヴァンの様子は一同の笑いを誘った。

「ヴァンよ、儂に話とはどんなことじゃ？」

「ああ、ここの魔術師たちは射出の呪文を覚えているかどうかを聞こうと思っていたんです」

「射出とな？　なるほど。裏切り者の鎧対策か。それは思いつかんかったわい」

「裏切り者の鎧？」

「先生、後で説明するよ。あの黒い鎧のことだけど、他にもいろいろ聞いたから」

「ありがとな、パティ。射出はマナの消費の割に欠点ばかり目立つ呪文なので、覚える者はあまりいないようです。ですが、その鎧には有効です」

「そうじゃな。儂の魔導書にもない呪文じゃて、お主さえよければ魔術師たちに伝授してやってくれぬか？」
「お引き受けしたいところではあるのですが、オレはまだ信用されているとは言いがたい。師に最適化した呪文文章だけお伝えして、それを広めていただくという方法は採れませんか？」
「ふむ。確かにそれがよいかも知れんのう。心得た」
「オレの話はこれくらいです、今のところは。アベル師のお話とは？」
「お主らがここへ来た理由を知りたかったのじゃ」
「なるほど。それは……」

ヴァンは順を追って丁寧に話した。
ニーズの街で偽竜という魔法生物が暴れ、戦ったこと。偽竜の出所を探ったら、里のほぼ真上にある要塞遺跡と分かったこと。持ち帰った遺跡潜りの腕は偽竜を手に入れられる水準と思えなかったこと。遺跡を探索してみたところ、偽竜が置かれていた部屋は入手の障害となるものがすべて無効化されていたこと。
これらを包み隠さず話したのである。

「そのあと追われているライチを見つけ、妖魔と一戦交えた後に罠で落とされたんです」
「ふむ……なるほどのう……」
「この里の人々は遺跡を探索することはないのですか？」
「ないのう。そんなことをしているときに里を攻められたら危険じゃて。稀に地上に用のある者や、日の出、正午、日の入りを知らせる交代の空見（そらみ）が出入りするくらいじゃ」
「空見、ですか？」
「訓練の最終段階の若い者が交代でつく役目じゃよ。地下空洞の天井からの光は一日中、変化せぬからの。時と日を知るためにはどうしても地上を見る必要があるのじゃ。地上への階段は長く急じゃか

ら、体力があり、それを伸ばしたい時期の若者を使う。空見は自分の担当する時の区切り……正午に昇ったら日の入りを見てから降りて来て鐘を鳴らす、それを聞いて次の者が昇るといった具合じゃ」
「先生、敵はどうなのかな？」
「妖魔族が遺跡探索か……その可能性も確かにあるな……」
「爺い、先月くらいからじゃなかったか？　空見が遺跡で妖魔の集団を見るようになったってのは」
「うむ。儂も思い出しておった。話と考え合わせるに、まず間違いないじゃろう。ヴァン、その仕掛けを無効化したのは、恐らく妖魔族じゃ」
「心当たりがあるんですね？」
「ある。妖魔族の総数はよく分かっておらぬが、里の人間の数倍いると思われとる。ゆえに、連中の断続的な侵攻は、時間稼ぎ、と見られぬこともないのじゃ」
「なんのための時間稼ぎですか？」
「遺跡探索じゃよ。何かを探しておるというのは、空見が遺跡で妖魔族を目撃していることと合致するしの。勇敢な偵察兵の卵がひとりで妖魔族を尾行したことがあっての。遺跡の外に出て、別の遺跡に入っていき、そこで何かを持ちだしたのを確認しておる」
「無茶をしますね……」
「まったくじゃ。当然、見つかって追いかけ回されたそうじゃ。逃げおおせてなによりじゃった。お陰でその話も伝わったしのう」
「ということは、その前までの攻め方となにか変わったの？」
「うむ。気取られぬようにしとるのじゃろうが、攻め手が緩くなった。これまでより送られてくる兵の質が落ちたように感じておる」
「……なぜそれ以前に、全力で攻めなかったんでしょうね？」
「さあてな。時間かけて削る腹だったのかもしれねえし、戦力としてはこっちが思ってるほど充実してねえのかもしれねえ。まあ、頭働かせようったって予想するしきゃねえんだ、本当のところは分かんねえさ」

「そうじゃの」
「確かに。何を探しているのかについては、もちろん分かりませんよね。オレが調べてきましょう」
アベルはゆっくり食事の残りに手をつけた。
「そういや、ヴァン、武器を造ってたんだろう？　もうできたのか？」
「いえ、まだ少し時間がかかりそうです。慎重にやる必要があるので」
「ほう、武器とな？　お主は射出には頼らんのか？」
「はい。石の剣というのを造っています。お断りしておきますが、これを増やすつもりはありません。強力であるだけに、使い手が多いほど対策も早く立てられると予想されますし、何より付与の材料が足りませんので」
「そいつはいいんだが、どんな代物なんだ？　それくらい教えてくれたっていいだろ？」
「……鎧に当たるとわざと壊れて、壊れたことで得られる力を破壊力として敵に叩きつけるというものです。魔力は力の誘導にしか使いませんから、この攻撃が鎧で無効にされることはありません。鉄の剣を使って試しました」
「一回使っただけで壊れんのか？」
「三十回くらいはすぐ直ります」
「お主も面白いものを考えるのう。いろいろ聞けて楽しかったわい。そろそろ帰らぬと娘夫婦がうるさいからのう。お暇する」
「射出の呪文文章をお渡しします。ホッグ、悪いんだが適当な紙を持ってきてくれ」
「出しっぱなしだからあたしの持ってくるよ」
パティが持ってきた紙に、筆記の呪文で文章を浮かび上がらせる。

「元の呪文と少し変えてあります。魔力による威力増加を省いて簡略化したのが最大の変更ですが。文章は簡単になり、射出の速度と破壊力はやや向上しているはずです」
「ありがたいことじゃ。あの鎧で最も泣かされたのが魔術師じゃて、喜んで覚えるじゃろう。明日にでも招集して訓練開始じゃの。儂は今夜、徹夜になりそうじゃが」
「オレが伝えたことは伏せておいた方がいいかと」
「儂が思い出したことにしよう。では、またのう」

＊＊＊

ヴァンたちが部屋に戻ると、パティもついてきた。

「どうした？　まだ眠くなくて勉強したいか？」
「だってルーシャさん、マナがざわざわしてるんだもん」
「……そうか」
「先生、ルーシャさんとなにかあったの？　喧嘩したの？」
「……喧嘩みたいなもんだな、確かに」
「仲直り、できない？」
「すぐには無理かな。すまんな、居心地悪い思いさせて」
「いいよ。慣れてるもん」

実の両親のことだろう。パティの父親は彼女を山賊に売った。そんな親のことを、どんな気持ちで思い出しているのだろうか？

「先生、射出の呪文、教えて」
「アベル師が明日、魔術師たちを集めて教えると言ってたろう？そこで覚えてきてくれ。今、呪文文章を教えても使うことはできないから、どのみち練習は里の魔術師たちと一緒にすることになる」

「どうして？」
「オレがあの呪文を持ち込んだと知られたくないんだよ。敵意をこれ以上、集めたくない」
「そっか」
「さてと、ふたりとも、頼んでおいた話を聞かせてくれ」

ふたりの話を総合して把握するのは少々骨が折れたが、いくつか質問を交えつつ、なんとか理解することができた。

「そうか……ひとつ、疑問が出てきたな。ムゼッカはどうしてここに来たんだ？　迷い込んだと言っていたが……ムゼッカの過去について知りたいな……」
「あれ？」

パティが何か感じ取ったようだった。今では無意識に静心応魔を使っているらしい。
ヴァンも同じく静心応魔に集中してみた。やけに小さくしか感じられないが明らかに人型生物のマナが三つ感じられる。侵入者なのは明らかに思えた。恐らく妖魔族の。

「……パティ、ホッグ、ここにいるんだ。こいつらは強い。作りかけの石の剣を隠しておいてくれ」
「へ、へい！」
「先生……気をつけて」
「……ああ」

扉を閉めてから防護の呪文をかけようとし、思いとどまる。
侵入者のうちひとりでも例の鎧を着用していたら、それによって簡単に魔法の守りは消されてしまうかもしれない。
迷っている場合ではない。マナの気配はひと塊で動いている。そ

ちらに向かおうとして――

「ルーシャ……」
「行くんでしょ？」
「……行こう」

言葉を交わすまでもなく、ルーシャが敵の気配を感じ取ったことが分かった。多くを語らず共に戦いの待つ方向へ急ぐ。ところどころに燭台があるとはいえ、石壁の通路は暗かった。

「歩きながら呪文使える？　できたら支援の呪文が欲しいの」
「鎧に触られたらすぐに消えるかも知れないが、幾つかかけておこう。ナイフを出してくれ」

魔法に抗うための精神賦活、受ける傷を軽減する中級防護、武器の威力を増す刃研ぎ、それに動きを捉えにくくする幻影で白兵戦を有利にする重ね陽炎、これらの呪文を使う。

小ぢんまりとした里の家々の中では大きめなムゼッカの家だが、地上の家屋を基準に考えれば小さめの部類に入る。そもそもが最低限の部屋数しかなく、ひと部屋も狭く、一階しかない。
侵入者のマナは最初、食事をした部屋にあったが、どんどん奥へ進んでいた。その方向にはふたつのマナが感じられる。ムゼッカとライチだ。食堂の窓が開け放たれている――というよりは、外されていた。その奥に、ムゼッカたちの寝室がある。
全知で壁と扉も脳裏に展開させてみると、敵は錠前を外そうとしているところだった。そして三体とも感知できた。鎧を着ている者はいないようだ。
視界に入らないように身を隠して近づいてから、さらに細かく、敵ひとりひとりの姿勢と動きまで感知してみる。こちらを警戒中が

ひとり、扉のそばで屈み込んで作業している――錠前を解いているのがひとり、武器を構えていつでも中へ飛び込める用意をしているのがひとり。

解錠までもうしばらくかかることを確かめると、ムゼッカの位置を調べて心話を使う。

（ヴァンです。心話の呪文で話しています。気づいていますか？）
（おう、来てくれたんだな。今ライチを隠れさせたとこだ）
（解錠されたら斧を持った大男が突っ込んで来るはずです。部屋の外にいる二匹のうちどちらかでも倒れたらオレも突入します。敵に金属鎧はいません）
（分かった。オレは長く戦うとなると体力に不安があるから、早めの援護を頼むぜ）
（はい）

あの達人にも弱みがあったのかと驚くと共に納得する。先の戦においてムゼッカはなかなか姿を見せなかった。敵の大将がはっきりするまでは。

さほど待つこともなく解錠は終わり、扉を開け放つと斧を持った妖魔が中に踏み込んだ。残る二体は部屋の外にいる……両者ともに魔法使いなのかも知れない。

ルーシャが目線を向けたので頷く。すぐさま彼女はどこから取り出したものか、ステッキを手に入口近くの妖魔に肉薄し殴りつけた。軽い炸裂音と共に響く怒号。

ステッキの先端には火薬か魔術か分からないが小規模な爆発の仕掛けが仕込まれていて、その力で無数の針玉が撒き散らされ、敏感な顔の皮膚を裂いたのだ。

本人は間に一瞬、厚めの布を広げて防いでいた。それを振り上げ前方に投げると瞬時に投げナイフに変化し、もう片方である弓使い

の右腕に刺さった。
ヴァンも物陰から姿を見せ、深睡の呪文で二体を眠らせようとした。しかしその考えを撤回する――敵の正体が分かったからだ。
「影妖魔か！」
影妖魔……闇のマナで守られた妖魔族で、見た目は漆黒の人型。平面化して影の振りをすることもできる。もっとも恐ろしいのはこの能力を活かした尾行からの暗殺だ。もうひとつの特徴は、闇のマナの影響で極度に魔法に強いこと。傷を与える呪文はまだしも、ただ深い眠りに陥らせる深睡のような、反発されると一切の効果を失う呪文では相性が悪い。
ヴァンは炎縄蛇締に切り替えて両者を攻撃した。ルーシャが殴った方は呪文に耐え、炎の縄がちぎれながら体のあちこちに貼り付いて焼き始めた。
弓で室内を狙っていた方は呪文が完全にかかり、全身が炎の縄でがんじがらめに縛られた。こうなると体を動かすのにも支障が出る。
ルーシャはいつの間にか逆手に握っていた二本の投げナイフで、最初に殴った方の目を炎の隙間を縫って斬りつけた。辛くものけぞって避けたが、完全に姿勢が崩れた。ルーシャがその足を払うのと敵が黒魔法を使うのとほぼ同時だった。
黒雷の呪文で発された漆黒の稲妻は、ルーシャとヴァンの体を貫通した。マナが強制的に燃やされて数秒間体が炎に包まれる。当然火傷を負わされることになる。魔族の力を借りる黒魔法らしい呪文と言えた。
ヴァンはその魔力の強さに驚いた。ふたりともマナを活性化して何とか不完全な効果に押さえ込んだが、ルーシャは支援魔法をかけていなかったら危なかっただろう。
弓を持っていた方が武器を小剣に持ち替えて、側方を向けているルーシャを狙おうとした。ヴァンは威力を増強した見えざる拳の呪

文でその右脇腹を攻撃する。強烈な一撃を受け壁に叩きつけられる妖魔。意識は完全に絶たれていた。

契約者の方はルーシャに任せることにして、ヴァンは部屋の入口に走り、一歩踏み込んだ。

「よお、遅かったな」

ムゼッカの戦いの決着は、すでについていた。最後の妖魔の断末魔がその言葉に重なった。

三・いたわりやがれ

身を潜めているその妖魔は人間そっくりだった。そのうえで、気配を完全に絶っていた。魔術師の言葉で言えば、マナを徹底して隠していたのだ。そして透視の呪文で先の戦闘のすべてを仔細に観察していたのである。石の家の平たい屋根の上から。ちなみに性別は、外見をあてにしていいなら女。

（よもや本当に失敗するとは……ナガルフォン殿が私に追跡させたのは大正解だったわけですね……）

メイリアは、さて、と考えこむ。

あの三人が揃っていては厄介だった。一番弱いナイフ使い女ですら、奇策を使って実力以上の強さを発揮する。ではどうするべきか？

（使い古された手ではありますが、寝静まってからの奇襲……増援を妨害する仕掛けを使い、なるべく短時間でけりをつける、といったところでしょうか……）

＊＊＊

生き残った襲撃者は弓使いと斧の戦士だった。ルーシャは手早く縛り上げてしまったが、これにムゼッカが異を唱える。

「どうせ殺すんだぜ？　尋問だろうが拷問だろうが、こいつらは何も話さねえよ」

「話さないなら、それなりのやりようがありますよ」

「魔術か？」

「……しまった。全知が通じない……人間じゃないから知識を読み

取れないのか……」

全知の呪文はヴァンが無制限に使えるある種の得意技だ。固定化である。その効果は知りたいと思ったことを知るというもの。ただし、知るためには幾つもの条件があり、問いかけ方を間違えると正しく知識を引き出せないことが多々ある。

今回は条件以前の問題だ。全知が働きかけるのは人の記憶。しかし妖魔は人ではないので何も読み取れない、ということなのだが……

半分はヴァンのはったりである。

「どうするの？　他の呪文を試す？」

「うーん……いい案を思いつくまで考えてみる」

「ヴァンよぉ、必要なのはどっちだ？」

「弓の方です」

返事の代わりにムゼッカのナイフが閃いて首を掻き切る。血しぶきの勢いからして致命傷なのは明らかだった。ルーシャが口元を手で覆った。

「え？　どうして？　何も殺さなくても……」

「脱走すっかもしんねぇだろぉ？　どんな報せにせよ、持ち帰らせるわけにはいかねえ。一番確かなのは殺っちまうことってわけさ」

「ルーシャ……戦争ってのは遊びじゃない。綺麗ごとをいつも貫けるとは言えないのが戦場なんだよ……」

納得には程遠い表情だが、ルーシャは反論もしなかった。十五歳という年齢にしては、いろいろな経験をしすぎていたからだ。

「んー、ここで睨めっこされんのもちょっとなぁ。悪いが牢でやってくれねえか？」

「分かりました。牢はどっちですか？　方向だけ教えてもらえればあとは適当に尋ねながら行きますので……」
「いや、ライチに案内させる。お前さん、信用されてねえだろ？」

＊＊＊

ライチに頼んでムゼッカの家を出ると、外があまりに明るいので軽く驚く。説明はされていたのだが、実際に夕食を済ませた後で明るい屋外を歩くというのが、感覚的に受け入れがたかったのだ。
牢まで案内されながら全知を使う。

（全知……こいつの名前を知りたい）
「ミレティアス」

問いかけへの答えはヴァンの新たな知識となって思い出される。そう、対象の位置を正しく把握しての使用なら、人間に限らず無生物からですら様々な事実を引き出せるのがもうひとつの効果なのだ。これは、対象がそのことを記憶しているかどうかも関係ない。

（ミレティアスの今回の使命は？）
「敵将の暗殺」
（オレたちがいることは知らなかったのか……なぜあの時期を選んだ？）
「敵将が勝利後に泥酔するのは周知の事実。その機会として適すると軍師が判断なされた」
（軍師とは？）
「策士ナガルフォン」
（ナガルフォンについて詳細を知りたい）
「問いが不適切」
（……こいつが知ってることでも、この調べ方じゃこいつに関係の

ない事柄は引き出せないか……だが、策士の存在は証明されたな……これまで策士から受けた命令を知りたい、略式で）

その回答は膨大な知識として高速で記憶させられ、思い出された。分かったことは、ナガルフォンが指揮権を持つこと、その元で軍隊組織化が進められたことだった。ミレティアス自身は肝心の遺跡探索には参加していないようだ。

「ヴァンさん？　ヴァンさん！」
「え？　ああ、どうした？」
「牢に着きましたよ」
「そうか。悪いがライチ、話を通してくれるか？　里の近くを嗅ぎまわっていたのを捕獲したと」
「何かなさるんじゃなかったんですか？」
「いや、もう終わった。すぐに処分してくれて構わない」
「はぁ……」

ライチが牢番に説明しているうちに、全知でアベルの位置を探し、心話を使う。

（アベル師、ヴァンです。心話にて失礼します）
（む？　どうかしたかの？）
（ムゼッカが襲撃を受けました。オレたちが手を貸して退けましたが、捕虜から分かったことをお知らせします）
（ヴァンよ、そやつは何か喋ったのか？　だとしたらそれは嘘じゃぞ）
（いえ、全知で調べて得た知識です。それなりに信頼できます）
（ほう……聞かせて欲しい）

簡単に説明する。それでいて、重要な部分はすべて含める。

（策士ナガルフォンか。よく調べてくれたのう。どんな奴か分からんのは残念じゃが、一連の命令の出所がそやつなら性格の端々が覗けるというものじゃて）
（はい。大局の判断からの指示、細かな部分への配慮ゆえの命令……相当な切れ者とうかがい知れます。策士の二つ名は伊達じゃありませんね）
（報告に感謝するぞよ。お主はどう動くつもりじゃ？）
（具体的に動くのはもう少し先になりそうです。もっと状況を飲み込まないといけない気がしまして）
（そうか……無茶するでないぞ）
（はい）

＊＊＊

ライチと共に帰るとそのまま石の剣の制作のため部屋に戻る。パティはまだホッグと読み書きの練習をしていた。

「パティ、まだ寝ないのか？」
「こっちで寝るかも」
「あんまり怖がってもしょうがないぜ。ルーシャも無闇に八つ当たりしたりはしないさ」
「うん……でももう少しいるよ」

石の剣の一本目を慎重に仕上げていく。これまで造ったことのない種類の武器だったので調整に苦労したが、及第点を与えられるだけのものができたと感じていた。二本目は気楽なものだった。手順を正確に思い出し、些細な過ちをしないよう注意しながらではあったが、かかった時間は比較にならなかった。
試してはいないが、全知はこの武器が期待通りの働きをすると保

証した。

「……先生、なんか変だよ」

「何がだ？」

「上の方にマナを感じるような気がして、でも探ると何もなくて、今、小妖精の月を使ってみたらね、なんか、虫みたいな薄いマナがやっぱりあるの。何これ？」

「……ちっ！！　二段仕込みだったんだ、しかも気づいたのがばれた。動き出すぞ……」

唐突に目の前に現れたのは特徴のない女……人間に見えた。

「その鋭さに感服しますよ、人間のふたり。ですが、邪魔はさせません」

言いながら袋の中身を鷲掴みにしてばらまいた。それは金貨ほどの大きさをした青い宝石に見えたが……すぐにその姿が電光に包まれた。

そしてあたりかまわず電撃を飛ばし始める。狙いも無茶苦茶だが数が十五以上いるので、対処の結界を張るので手一杯だった。

パティとホッグの姿を二重の結界が包み込んだ。魔法と実体、それぞれに対応する防御結界だ。そしてばらまいた張本人は現れたときと同様、忽然と消えていた。

「パティ、ホッグ、結界が解除されるまで動けないが我慢してくれ」

迷わず扉を開けてムゼッカの部屋へ向かう。その途中にまた奴がいて空飛ぶ雷の塊をばらまいていた。ルーシャがそれを見て進むのをためらっている。

「ルーシャ、こいつらの攻撃はナイフで弾き返せる。壁を背にして戦ってくれ」
「無茶言わないで！　数が多すぎる……一掃しちゃってよ！」
「やってはみるが……」
「どうぞやってみてください」

言って、またその姿が消える。

「ムゼッカ！　敵です！　魔術の使い手です！」
「オレの心配はいらねえよ。この程度ならすぐ片付く」
「妙な戦い方をする奴です！　この手の敵は侮れませんよ！」

しばらく迷ったが、三つの呪文を順に使った。
蝕魔虫召喚によって爪ほどの大きさの甲虫が多数、部屋に現れた。雷撃にはせいぜい三発しか耐えないが、触れただけで雷の魔法生物が消滅することを確認した。
第二の呪文はルーシャに。逐次治癒の呪文は傷を受けたときにすぐに癒しの効果が現れるというもの。
そして、第三の呪文でムゼッカの部屋へ瞬間転移した。

＊＊＊

ムゼッカは苦戦していた。これまでに戦ったことのない種類の敵だった。姿が消えたと思うと、直後に死角から小剣を突いてくる。
初撃を軽傷で済ませることができたのは、ヴァンの忠告を聞いて彼の技である揺り草を使っていたからだ。感覚を研ぎ澄まし、些細な空気の動きに合わせて反射的に回避行動を取る技だ。それでも手傷を負った。しかも――
「毒とは周到だねぇ」

「名にし負う闘将に、手土産なしは失礼でありましょう」

ヴァンは解毒と防毒の呪文をムゼッカにかけた。毒は消えたようだがムゼッカは毒に苦しんでいる演技を続けている。

ムゼッカが歩を踏み出した。その一歩が限界を超えた加速を生み、暗殺者を貫くのだが……達人は消えた敵の残像を抜け、壁を蹴って宙を舞い、足が上の状態で真下に出現した暗殺者の頭頂部を狙った。またも消え、今度はヴァンの目前に現れる。

「短距離転移の固定化か！」

「正解……便利なんですよ、これ」

固定化とは魔術の特定の呪文を、詠唱もマナの消費もなしに使用できるようにする儀式のことだ。指を動かすように短距離転移を繰り返す敵は、速いという言葉では言い表せなかった。

首を裂かれるが、先日の戦いから持続している薬の効果で傷はすぐに癒え、毒も消える。心臓への突きは途中で止まり、致命傷を肩代わりする護符が砕け散った。

（どうすりゃいい……こんな奴相手に……！！）

全知を使ってルーシャのいる場所の様子を探る。

ほぼ掃討は終わっているようだった。迷ったが、ルーシャの機転に頼ることにして彼女を呪文で召喚する。

「わ！　ちょっとヴァン、ひと言ないと驚くでしょ！」

直後に物理遮断結界でルーシャを覆う。予想通り、敵はルーシャの心臓を狙うために至近距離に転移した。金属音と共に小剣が弾かれる。

「結界ですか……こんなものは……」

どす黒い色を想起させる声を発し、呪文を詠唱する暗殺者。この結界が防げない攻撃呪文を使うつもりだ。詠唱しているのは衝撃槍なのでそこまでに間違いはない。問題はその後だ。

ヴァンが無詠唱で魔法阻害結界を張ることは予想しているだろう。ではどんな手を打ってくる？　と、考えをここで放棄する。

材料が少なすぎ、敵が取りうる選択肢が多すぎるからだ。どんなことにも対処しうる対策を選ぶ。

まずルーシャに魔法阻害結界、強力な白色の槍――衝撃槍がそれに阻まれる。次に狙われたのは背後から心臓を狙ったムゼッカだった。さらにその背後から短剣を投げられた。背に目があるような動きでその攻撃をかわすムゼッカ。

腰帯から指よりやや長い針を三本引き抜き、一本を振り向きざまに投げる。

ここでヴァンはあることに気づいた。すぐに瞬間転移で屋根の上に飛ぶ。消えた暗殺者の次の狙いがヴァンだったのはただの偶然だった。

ヴァンは透視を使った。全方位のさほど遠くない距離までが障害物を透過して見えるようになる。ムゼッカの戦況は再び苦しくなっていった。体力に不安というのは本当のようだ。しかも今日だけで三戦目だ。

全知で暗殺者のマナの属性が地であることを確かめると、風の友を大量召喚した。召喚先はムゼッカたちの部屋だ。

ムゼッカの視界に、白い小さな竜巻のようなものが無数に現れた。突如としてだ。警戒する、これも敵の術かも知れないと。それを否定したのはルーシャだった。

「おじさん、これはヴァンがやったことだから、気にしないで戦って！　ぶつかっても大丈夫だから！」

次いでルーシャも結界が消えて自由になる。その頃には避けるのが非常に困難な程に風の友が増えており、部屋を時計回りにゆっくり回り始めていた。

ルーシャは上半身を前に倒しながら右足を後ろに振り上げた。そこに出現した暗殺者は虚を突かれてまともに蹴りを受ける。そして風の友と接触し……血飛沫が舞った。

（ぐっ！　こいつらには無害で、私にだけ攻撃性を持つわけですか……属性ですね……面倒な）

暗殺者は転移で飛んだ。屋根の上へと。

「へぇ、距離を取ったか。てっきり一撃で仕留めに来ると思ったが……」

「見事な策です。ですが、諦めるほどではありません」

「どうするんだ？　お前の目当てはあの人の死だろう？」

「荒っぽいことをするのですよ」

唱えた呪文は光球爆砕、基準となる一点から光の破片を爆発的に飛散させ、攻撃する範囲攻撃呪文だ。ヴァンは詠唱中に音豹駆の見えない高速攻撃呪文を放つ。しかしそれすらも消えて回避され、次の瞬間、ヴァンの肉体を刺そうとした小剣……それが根元から折れた。折れる寸前に、小剣を通じて呪文が流れこんでいた。

ヴァンの肉体を攻撃一回分だけ鋼のようにして防いだのが鋼身の呪文、間接的に触れた対象に呪文をかけたのが仕込み呪。そして、ヴァンが仕込み呪でかけた呪文は――

瞬間転移の気配を感じて固定化してある短距離転移を使おうとし

たメイリアは、それが不可能であることにすぐに気づいた。呪文を指定して封じられたのだ。仕込み呪でかけた呪文封じの効果だった。同時にムゼッカたちの部屋へ戻される――ヴァンの瞬間転移に巻き込まれて。

戻された瞬間、身を捻って風の友の隙間をくぐり抜けることを余儀なくされる。しかしヴァンは風の友をあえて密集させて暗殺者の全身を切り刻んだ。風の友は次々と弾けて消え、とうとういなくなった。

「転移は封じました。仕留めましょう」

「手こずらせてくれたなぁ、おい」

ムゼッカとルーシャが揃って近づいていく。暗殺者は新たな小剣を構えた。もう片方の手には短剣。全身血まみれになりながらも戦いの意志を捨てないのは、誇りか、あるいは後に引けないのか……。

部屋は大した広さもなく、三人が接触するのはすぐだった。ルーシャはムゼッカの動きをそっくり鏡写しに真似た。防戦一方になるメイリア。ムゼッカは感心しつつ、幾つか彼独自の攻撃を試みてみた。完璧な再現とはいかぬまでも、理にかない、効果も見込める攻撃をルーシャは見せた。

なまじ全く同じ動きなら対処もしやすかったかもしれない。微妙にずれた動きは彼女の体に次々と傷を増やしていき、ついに致命傷へ至った。

「く……！！　ここまで……ですか……」

完全にメイリアは動くのをやめた。

「ほんっと、なんなのよ、こいつ……」

「奥の手って感じだったな。確実にムゼッカを仕留めに来たんだろ」
「ったく、少しは老人をいたわりやがれ！」

一・やってやるさ

達人は心底疲れたといった風情で寝台に腰掛けうなだれた。
ルーシャは手早く髪を解くと、ナイフを放り上げるような仕草と共に消した。
ヴァンは全知でライチの居場所を調べた。遠い家にいることが分かった。

「ライチ嬢は――」
「ルーシャとか――」
「ねえ、おじさ――」

三人の声が重なり、苦笑がそれに続いた。

「ムゼッカからどうぞ」
「ライチはキ・ハの婆さんの家に預けた。こんな事態を考えてな。襲撃があった日はいつもそうしてるんだ。で、嬢ちゃんの話は何だ？」
「おじさんは……おじさんの話は？」

奇妙な返答を受けてしばしムゼッカはルーシャの顔を見つめていたが、そのまま話を続けた。

「あー、オレは、嬢ちゃんに幾つか聞きたいことがあってな。ルーシャでいいか？」
「え？　はあ……」
「ルーシャは、業師だよな？　それにしちゃ、我が強い戦い方をすると思ってな。嬢ちゃん、どんな師匠から業師の戦い方を教わったんだ？」

「戦闘術は……えっと……あたし、あまりいい生徒じゃなかったから……」
「んー？　なんだ、師匠が何人もいたクチか、オレみてえに？」
「うん……」
「んで、しまいにゃ我流か。それなら分かる」

ムゼッカはさもありなんといった感じでひとつ頷いた。ルーシャは目を逸らしてばつの悪い表情を見せている。

「ルーシャ」
「……はい？」
「強くなりたいか？」
「え……」
「オレも若ぶっちゃいるが、先のねぇ爺いにゃ違いねえ。そんな爺いでもよ、自分が築き上げたものを残してえって欲もあるんだ。ルーシャさえ迷惑でなけりゃ、オレの辻風、盗んでみねえか？」
「……おじさん、ひとつだけ条件を出してもいい？」
「条件？　言ってみな」
「明日でいいから、ヴァンと勝負して」
「お、おい！」

慌てたのはヴァンである。無理もないが、まさかここで自分の名前が出るとは想像もしなかったのだ。

「ふうむ。面白えじゃねえか。賭けでもすんのか？」
「ううん、ただ本気で勝負をして欲しいだけ」
「お、オレの気持ちは無視かよ？」
「文句でもある？」

ここに来てようやく分かってきた気がした。要は当てつけなのだ

ろう。それにしても……

（頭が痛い提案だぜ、まったく……）

「どうしたヴァン？　怖じけづいたとは言わねえだろ？　言っとくが、手加減なんぞしたら本気で殺すぜ」

「……オレ、致命傷はあと三回まで護符で避けれるんで、これがひとつでも壊れたら負けってことで」

「わざと負けるつもりでしょ？」

「んなわけあるか！　どれだけ高いと思ってるんだよ！　死を回避する護符だぞ！？」

「じゃあもったいないから外して戦うことね」

「……分かったよ」

「楽しくなってきたぜ」

ムゼッカはそれはそれは愉快そうだった。どんなに変わり種でも武の人なんだなと、心から思い知らされたヴァンだった。

「なあ」

唐突に小声をかけたのはムゼッカだった。ふたりは黙って続きを待った。

「今日はもう遅ぇから寝るぜ。死体はヴァン、頼むわ」

「おじさん、大丈夫？」

「敵さんが休ませてくれねえから疲れただけだ。寝れば治る」

「ルーシャ、行こう。ムゼッカ、また明日にでも」

「おう」

ムゼッカは戦いのときの迫力がまるでない疲れ果てた様子で、寝

台の毛布に潜り込んだ。ヴァンたちの方を向かないようにして横になる。ヴァンはすでに気づいていたが、ひとまずは死体の処理だ。

＊＊＊

死体を手前の部屋まで運ぶと、ヴァンは生き残った触魔虫七匹を誘導してホッグとパティの待つ部屋へ入った。わざと魔法生物に自分を狙わせながら触魔虫が雷の本体にぶつかるのを待つ。一匹だけ残ったので吸精掌の呪文を使ってから雷を捕まえると、一瞬ですべてのマナを吸収され尽くした魔法生物は、小気味よい音を立てて壊れた。静心応魔で生き残りがいないことを確認してから、パティたちの結界を解く。

「あー、立ってるの疲れた～」

「お、おいらも……」

力なく寝台に倒れこむふたり。

「悪い、もう少し大きめに結界張って、座れるようにすりゃよかったな」

「無理だよ～。あんな怖いのに囲まれて座ってられないよ～」

「さすがに今日はこれ以上の襲撃はないはずだ。とはいえ、一応警戒策は講じておくがな。パティ、そろそろ部屋に戻ったらどうだ？」

「そうだね。……あ！」

「どうした？」

返事を待たずして答えは分かった。

玄関の戸を開けてムゼッカを呼びながら入ってくる男たちの声が聞こえたからだ。

「ここはずいぶんと来客が多い家だな……」

＊＊＊

訪ねてきたのはキ・ハとライチ、それに若い戦士たちと虹使いたち数名、残る三人は偵察兵と見えた。総勢二十二名だ。ルーシャたちはすでに寝ているので、ムゼッカに付き添う形でヴァンだけそこに加わっている。刺客の死体はキ・ハの連れてきた若者が運びだしてくれた。

「婆さん、見てやがったんだろぉ？　どうしてすぐに応援を寄越さなかったんだ？　大変だったんだぜ？」

「大変だったというのが重要ね。あなたが苦戦するような相手に、この子たちのような普通の精鋭を送り込んでも人質が増えるようなものだわ。あるいは犠牲かしら。第一線を退いて久しいあたしでも同じ」

ヴァンは疑問をぶつけてみた。

「キーハ、見ていた、というのはどういうことですか？」

「静心応魔で見ていたの。ああ、外の魔術師なら知らなくて当然ね。虹使いはね、静心応魔の感知領域を、自分から離れた場所に移せるの」

「ええ！？　……これまで何度か虹使いと行動を共にしましたが、誰もそんなことは言っていませんでした……」

「言いにくいはずよ。まるで覗き見みたいじゃない？」

「それもそうですね……」

「なあヴァン、おめえもいつまでそんなお上品な言葉遣いしてんだ？　仲間と話すみてえに、普段通りに喋っていいんだぜ。おめえは客人だしな。なあ、キーハ？」

「そうね。若者は歳相応に生意気なくらいがちょうどいいわ」
「……じゃあ悪いけど素で喋ることにする。あの襲撃者、人間そっくりだったが、妖魔族だよな？　あの、消えたり出たり忙しかった奴」
「ああ。たまにいるんだ。人の血が混じっているんだかそういう種族なんだか分からねえけどな」
「ねえふたりとも、静心応魔では分かりにくかったのだけれど、あの敵は何をしていたの？　出たり消えたりってどういうこと？」
「短距離転移って呪文を固定化してたんだ。詠唱もマナの消費もなしで好きなだけ瞬間移動できるように」
「そんでもって武器もそれなりに使いやがるんだ。うっとうしい奴だったぜ。二度とあんなのとは闘りたくねえな！」
「あら？　ムゼッカならもう戦い方を考えているんじゃなくて？　同じ手は二度と通じない闘神殿」
「まあな。つーかキーハ、闘神はよせって言ってんだろぉ！」
「ふたりとも疲れたでしょうから簡単に言うわ。ここに護衛戦力と見張りを配置します。寝室にも寝ずの番を置くけど気にしないでちょうだい。これ以上の襲撃はないと思わせることこそが、敵の狙いかも知れないですからね」
「まあ、しょうがねえやな。オレは寝るぜ」

ふらふらと立ち上がると背を向けたまま手を振り、ムゼッカは寝室へ戻った。ヴァンはその後ろ姿をしばし見送った。

「ヴァン、何か考えごと？」
「え？　ええと……ムゼッカの体調について何か知らないか？」

キ・ハはヴァンを試すように見つめてきた。ごまかすように目をそむけて言い訳めいたことを呟くヴァンの様子を見て、ため息をつく。

「気づいたのね。ええ。あの人はもう長くないわ。重い病でね」
「……虹魔法には病気を治す呪文もあったよな？」
「試してみたわ。あたしにも無理だった。酷い話よね。長生きして欲しい人ほど早く死んでいく……」

返す言葉がなかった。それでも問いを重ねねばならない。ことはムゼッカひとりの問題ではすまないのだ。なぜなら――

「キーハの見立てじゃどれくらいだ？」
「もって一年、早ければ一週間でも驚かないわ」
「そうなったらどうするんだ、隠れ里は？」

老婆は深くため息をつき、しばらくの間、瞑目していた。十秒ほど待ったろうか。再び細い目が開く。

「どうにもならないでしょう。敵に気づかれない内にここを捨てることになるわ。サムソンは反対するでしょうけどね」
「でも、地上に出たとしてそれからどうする？　当てはあるのか？」
「どうするのかしらね。そのときにならないと分からない……いえ、調べておくべきよね。もっと早くにそうしておくべきだった」
「人里離れた場所に集落でも作るのか？　地上の国に見つかったら……」
「それは問題ね。あたしたちを追いだそうとするかしら？　それとも軍事力として取り込みたがるかしら？」
「それでいいのかよ？」
「四の五の言ってられないでしょう。ヴァン、いらない心配はせずに、もうお休みなさい。あなたも疲れたでしょう」

ヴァンは黙って立ち上がり、少し迷った末、目を逸らして呟いた。

「明日、ムゼッカと勝負をすることになっちまってさ」
「まあ。それは見ものね。誰が言い出したの？」
「ルーシャが。当てつけでね。まったく、かったるい話だぜ」
「どうするの？　勝ちを取りに行く？　それともわざと負ける？」
「手加減したら殺されるらしいからなあ。勝つしかないらしい」
「大変ね。応援するわ」
「はは……ま、やってみる。じゃあ……」
「ゆっくりお休みなさい」
「ああ。キーハも無理しないでくれよ」
「ええ」

＊＊＊

明るい夜は更けてゆき、ヴァンが目覚めるとそこにあったのは――騒がしい朝だった。

「ヴァン・ディール！」
「万能魔術師！」
「出てきやがれ！　身の程知らずのヴァン・ディール！」

家の外から大勢の声が聞こえてくる。ホッグとヴァンは顔を見合わせた。

「出た方が、いいんでやすかね？」
「……隠れても仕方なさそうだからなあ」

手早くローブを着ると、ヴァンはそのまま外へ出てみた。二十人ほどの若者たちがヴァンの名を連呼していた。姿を見た若者たちは拍手をするやら声を張り上げるやら……とにかくうるさくてしょう

がない。

「あー、呼ばれたから出てきたんだが……何なんだ一体？」

若者のひとり――額を真横に斬られた傷跡がある少年が答えた。

「オレたちは、身の程知らずのヴァン・ディールを応援するぜ！」

「……は？」

「とぼけんなよ！　張り紙、見たぜ！　――万能魔術師ヴァン・ディールはここに宣言する。里の英傑ムゼッカと決闘し、必ず勝利を納めてみせることを――　くぁ～～～！！　痺れるじゃんか！」

「いつ闘るんだ？　待ち切れないんだよ！」

戸惑うヴァンに構うことなく盛り上がっている。

（……ああ、ルーシャか。ここまでやるのかよ……）

「闘いの時刻はムゼッカと話し合って決める。それから、オレは万能魔術師なんかじゃない。そんなものどこにもいないんだよ」

「絶対勝ってくれよ！　あんたに馬乳酒ひと月分、賭けたんだからよ！」

（賭けまでかよ……）

娯楽が少ないのであろうが、発案はルーシャに間違いないと確信した。そこへ気配もなくムゼッカが現れた。

「おう、この罰当たりども！　残念だったなあ。ヴァンの野郎はこのオレさまが血だるまで平伏させてやるんだ。賭けなんざ知ったことか！　勝負は日没の空見が鐘を鳴らすのを合図にする。せいぜい

応援してやんな、無駄だがなぁ！」
「ムゼッカさま～、今回だけは負けてくれよ～」
情けない声に皆が大笑いする。ムゼッカはヴァンを促して家の中に戻っていった。

＊＊＊

「なあ、ヴァンよ」
「ん？」
「オレたちも賭けようぜ。何でもいいからよ」
「はぁ……何でも、いいんだよな？」
「おう」
「だったら……あんたがここを訪れた理由、留まり続ける理由を知りたい」
「なんでぇ、そんなことでいいのか？」
「ムゼッカ、あんたがさり気なくその話題を避けてるのに気づいたんだよ。そんなこと、じゃすまないんだろ？」

その言葉を聞き、短い沈黙を返す。ヴァンとホッグにあてがわれた客間の前で立ち止まり、振り返る。諦めにも似た笑いを浮かべて。

「へ。憎らしい野郎だよ、おめぇは。いいぜ、おめぇが勝ったらぜんぶ話してやらあ。でもよ、全知とか言ったか？　そいつで調べた方が早いんじゃねぇか？」
「聞いて教えてもらえることを勝手に全知で調べるのは気が引けるってのがひとつ。もうひとつの理由は、全知じゃ隠そうとしてることを引き出せないんだよ」

無論、これも後半はただの言い訳にすぎない。

「なるほどな。で、オレが勝ったらだが……」
「あー、オレから何か欲しいって場合、悪いけど聞けないことがあるんだ」
「いや、オレがもらうんじゃなくな。もらうのはヴァン、お前さんだ」
「は？」
「ライチを女房にしろ。これがオレの条件だ」
「な……何言って……！　だいたいライチの気持ちだってあ……」
「よろしくね、ヴァンさん！　旦那さまの方がいいかな？」

気配を殺す術は祖父譲りなのか、あるいはヴァンが動揺しすぎていたのか……前方にいるライチに気づけなかったことに衝撃を受ける。

「ひひひ、おめぇから何か取るわけじゃねえから、断らねえよな？　断りやがったらもっとえげつねえ条件だって考えてあんだぜぇ？」
「わ、分かった！　あああ、勝てばいいって話だろうが！　やってやるさ！」

ヴァンは知らなかった。
盗み聞きしていたルーシャが、意地の悪い笑いを一変させて完全に凍りついていたことを……。

二・いけるだろ

いつだってヴァンはひとりで考え、自分で行動し、自力で解決してきた。

と、いうのは大きな思い違いだ。

そばにはいつもルーシャがいて、他にもパティとかホッグとか、レンダル、フリードリヒ、アガトナ……とにかくいろいろな人に助けられながら問題に当たってきたのだ。

それが、現実。

その現実が今、揺さぶられようとしているのにヴァンが気づくのは――ほんの少し後のことになる。

＊＊＊

朝、ライチの手料理を揃って食べている時だった。ヴァンは唐突にアベルの声が頭に響いたので驚き、危うく鶏の味を丹念になじませた煮汁の深皿を取り落としかけた。

（のうヴァンよ、小さな魔女はまだ寝ておるか？）

（うおう！？　え！？　アベル師……心話ですか。よく位置を正確に特定できましたね……）

心話の呪文で話をするためには、相手の現在位置を正しく把握してから呪文をかける必要がある。通常は視界に入っている相手にしか使わない。

「なんだぁ？　落ち着きのねぇ……ヴァン、何慌ててんだ？」

「どうしたの？　先生」

「い、いや、何でもない……」

ライチが非難がましい視線を向けてきたのだが、優先するべきはアベルとの会話と考え、それについては気づかないふりをした。

（む？　お主は見張りの呪文を知らなんだか。一度かけておけば、持続している間は対象の居場所、健康状態、精神状態をいつでも知ることができる呪文じゃよ）

（ああ、あの呪文でしたか。全知で代用できると思ってろくに調べなかったんでした。パティに何か……あ、射出ですか）

（うむ。気が早い者たちがもう集まっておるぞ。パティも覚えるのじゃろう？　早う連れてくるとよい）

（連れていくのは……無理そうです。ルーシャのせいで、オレに恨みを持っていた人々はなおのこと、激怒しているでしょうし……）

（何じゃ、どうかしたのか？）

（ムゼッカとの決闘ですよ。よりにもよってルーシャはそれを貼り紙で宣伝したんです……しかも挑戦状ですよ、オレの名前を使って……）

（かっかっか。あれはそういうわけじゃったか。大した度胸じゃと思っとったが、今のお主は女々しいことこの上ないぞ。もっと堂々としておればいいんじゃよ）

（そう言われても、なぁ……）

（とにかく、待っておるぞ）

「パティ、アベル師と魔術師たちはもう射出の練習を始めてるみたいだ。食い終わったら行ってこいよ」

「えっと、あたしひとり？」

「いや、ルーシャが付いて行……」

「ごめんねパティ。あたしまだ眠くって……」

「……ホッグ、頼んでいいか？」

「へい。丸焼きだけ最後まで食べさせてもらえやしたら！」

（参ったな……ホッグと話しながら考えようと思っていたんだが……）

ルーシャとの間に生まれた些細なわだかまりはまだ消えていない。少なくともヴァンの側では。

思い悩んでいる間にもパティとホッグの食事は終わり、ふたりは出て行ってしまった。不機嫌そうに黙り込んだルーシャと、対照的に明るく振る舞うライチに二重の居心地の悪さを感じつつ、ヴァンもさっさと食事を切り上げた。

＊＊＊

寝台で寝転がりながら思考を巡らすヴァン。だが一向に考えはまとまらない。さまざまな雑念が邪魔をする。途中まで造った作品の方向性について悩む芸術家のような心情をヴァンは味わっていた――無論、ヴァンは芸術家ではないのでそのような経験はないのだが。

ふと、部屋の外の声が耳に入る。

「ちょっくら出てくるぜぇ」
「いってらっしゃい。お昼には帰れる？」
「おう。すぐ帰ってくらぁ」

ヴァンは素早く寝台から飛び起き、扉を開けた。遠ざかりつつある背中に呼びかける。

「ムゼッカ、どこに行くんだ？」
「ああ、ヤボ用だよヤボ用。んー？　なんだヴァン、気になるか？　そぉんなに気になるかぁ？」

言葉の途中で立ち止まり、わざとらしく背を向けたまま答えたムゼッカの声には絡むような響きがあった。

「いや、そんなことは……」

「しょうがねえなあ、少しくらいヴァンの勝率を上げとかねえと、つまんねえだろうしな！」

「だから、無理に聞くつもりはな――」

「おめぇの石の剣を参考にしてな、オレも武器を造らせることにしたんだ。夕方には間に合わせにゃならんからちょいと脅し入れとく必要がある。詳細までは言えねえ。ま、楽しみにしてな！」

「……なんでそんなことを話すんだ？」

ムゼッカが振り返る。その表情はふてぶてしく笑っていた。

「馬鹿野郎！　ちょっとくらいおめぇが有利な条件でもねぇと、勝負がつまらなくなるじゃねえか！」

「よ、余裕だな……」

「当たりめえだろぉ、ただでさえ確実なオレ様の勝利が、この武器でより完全なものになるんだよ」

「そうかい。オレは、これからあんたに勝つための策を考える」

「ほぉう。で、それがどうした？」

「それがオレの武器ってことだ。必勝を期すための、な」

「わざわざ言いやがったか。いいだろう。泣かせてやるぜ。じゃあな！」

扉を閉じ、ため息をひとつつくヴァン。唐突に背後から声をかけられる。

「馬鹿じゃないの。余計なこと言って。余裕もない癖に」

心臓が跳ねる。今、一番声をかけられたくない相手――ルーシャだからだ。振り向くと、窓が開いてカーテンがやわらかな風に揺れている。
今さら気づいたが、地底にも関わらず地上と同じような風が吹いている。

「ルーシャ……ええと……朝食に起きてきたこともそうだが、珍しいな。眠くないのか？」
「朝食はライチに叩き起こされたの！　今は眠いけど誰かさんたちがうるさくて眠れないんでしょ！」
「ああ、すまん……もう終わった……」

謝りながらもヴァンは思った。この石壁では隣の音なんかほとんど聞き取れないだろうに……耳がいいのも考えものだな、などと。
ルーシャは寝台に腰をかけて、じっと目前の壁を睨んでいる。

「……ああ、ルーシャ、眠れないんならちょうどいいや。少し話を――」
「駄目」
「え？」
「立ち聞きされてるから作戦会議は無理」

ルーシャが見もせずに入口の扉を指差す。ヴァンはとっさに静心応魔を使う。扉の向こうに希薄なマナが感じられた。

「ライチ……また盗み聞きかよ？」
「あら、だってここは私の家だもの」
「そういう問題じゃないだろ……」

いつの間にかルーシャは開いたままの窓に手をかけていた。そし

て言う。

「やっぱり寝てくる」

「そ、そうか……わかっ……」

「勝ってよね」

唐突にそう言われ、ヴァンは言葉を失う。意図が読めずにいたこともあり、返事を返す前にルーシャは猫のような動きで外に出てしまった。その窓を閉めに行く。入ってくる風が静止する。

なんとなく静心応魔を使うと、ルーシャの部屋に戻るルーシャのマナと、まだ扉の外にいるライチのマナが感じられた。癖になりつつあるため息をまたひとつ。

「ライチ、よほど重要なことでもない限り、オレは君と話していられないんだ、今はな。そういう用件があるか？」

「いいえ。ちょっとおしゃべりの相手が欲しかっただけだもの」

「ならいいな。オレも出かけてくる」

「え？　どこへ行くんですか！？」

ライチは扉越しの返事か、扉を開けて出てくるヴァンを待ったが、どちらのあても外れた。瞬間転移で逃げてしまったのだから当然である。

＊＊＊

地下大空洞の天井をぼんやりと見やる。上の方は白い靄がかかっているようでよく見えない。それに靄が発光しているから余計に眩しくて、目をいつまでも開けていられない。閉じるとまぶたの裏に、緩やかに流れる靄の軌跡が青い残像として残っていた。

ヴァンが転移した先は真上、つまりムゼッカの家の屋根であった。

そこに寝そべり、今度は全知で靄を調べてみる。
構成しているのは濃密なマナの染みこんだ水蒸気。火のマナで熱と光を生み出し、それを水のマナが冷却し、風のマナが天井付近の高度に留まらせている。

（違うだろう。大空洞の明るさの仕組みを知るために来たわけじゃない。考えることがあるんだ。そうだ、考えないと……）

ヴァンの性質は、ひと言で表すなら「思索」である。
何かに遭遇したとき、まず反応するのは思考であり、具体的な対処を探るためにも考える。
それは水属性のマナを持つ者の典型的な行動原理のひとつでもある。

（ルーシャは一体、何を考えてるんだ？　最初は明らかにオレがムゼッカに負けることを望んでいたはずなのに、勝ってよね、って言ったよな……どうなってる？）

全知で調べたい誘惑に駆られるが、勝手にルーシャの記憶を覗くことは気がひけた。そもそも、もっと重要なことがあるではないか。考えを他へ向ける。

（問題は、ムゼッカと妖魔族だ。ムゼッカは一体何を隠してる？……いや、これは勝ちさえすれば聞けるんだったな。次は……敵か。なぜ一気に攻めてこないのかが、アベル師の説明でもどうも腑に落ちない……攻め手が緩かったのは昔からだろう？　最近始めたという遺跡探索の時間稼ぎじゃあ説明しきれない……）

隠し事をしているのは、恐らくムゼッカだけではないのだ。それぞれが隠している内容は、つながりはあっても別々のこと……。遺

跡探索自体も問題だ。何を求めている？　偽竜はあっさり捨てて、目当ての品だけを狙っているのか？

（全知で調べておくか。これについちゃ、誰に遠慮する必要もないからな）

まず全知で地上の第四要塞遺跡を探しておく。その高度を維持し、水平方向に探査範囲を広げる。探査対象は――

（妖魔が探索した遺跡……三カ所か。どれも要塞跡……妖魔族が持ちだしたものは？　……駄目か、この条件ではなぜか探れない。だが、とっかかりは掴んだな。要塞にあるものを探していたわけだ……要塞と戦争、当然、戦いに関わる道具なんだろうな）

余裕ができたら、妖魔族の住処を訪ねてみるのも悪くないかも知れない。平和な訪問とはならないだろう。仲間を連れて行くのも難しい。

（まあ、それも後の話だ。そのときには忘れずに策士と鎧の作り手も調べてくる必要があるな。裏切り者の鎧……か。裏切ったのはサムソンと里の者たちだろうに……）

ふと、根本的な疑問を忘れていたことに気づく。

（そもそも、なんでここは戦争をしているんだ？　隠れ里がただ攻められているというのは事実か？　過去に何があった？　全知……過去にこの大空洞で人間と妖魔族の間で起こったこと……まあ、駄目だな。絞り切れない量の知識か。頭に叩きこまれたら発狂しかねない）

ふと、ルーシャの声が欲しくなった。恋しくなった、と表現すべきだろうか？　だがヴァンはルーシャと恋を結びつけて考えることができない。それで漠然と思うのだ。

（この作業も、誰かと話しながらならだいぶ楽なんだがな……）

風が頬を撫でたので、目を開けて身を起こす。優しい風だった。

（自然な風に、自然な明るさ……まあ、日没までは反映してくれないが。ここにあるすべては、恐らく魔術や虹魔法による人工的な環境なんだろうな。年代は、ざっと三百年以上前ってとこか――いけね。肝心なことを忘れていた）

ヴァンはムゼッカが造らせると言っていた武器について思いを巡らす。そして、その予想も踏まえて、あの達人を殺さずに勝負に勝つ方法を模索する。昼が過ぎてもヴァンは考え続けていた。

眠っていることに気がついて全知に時刻を尋ねる。午後の四時過ぎだった。余裕を持って戦いに望むためには、そろそろ腹に物を入れておいた方がいい。

「まあ、これでいけるだろ」

ヴァンは転移で部屋へ戻った。

三・手こずらせてくれる

巨岩をくり抜いて造られた宮殿。中には熱を持たぬ魔法の光を灯すランプがそこここに置かれていて、十分な明るさを供していた。熱を伴わぬ光なので、宮殿内はよく冷えたぶどう酒蔵のようだった。

だが氷のマナを友とするナガルフォンにとっては、何の問題もないどころか、快適な環境でさえある。

「メイリア君はまだ帰りませんか……困ったものです。彼女なら確実に闘将の息の根を止められるはずだったのですがね……」

優美な言い回しがよく似合う美丈夫である。人間の目からすれば額から生えた二本のねじくれた角は異形であったが、それすらも美貌の一部と認識させるほどに、彼の整った顔立ちとすらりと細長い肢体は蠱惑的であった。

身にまとっているのはゆったりとした青白く長い衣……人間の衣装でいえば、ドレスが最も近い。それが似合っていた。手には錫杖を持っている。その先端には漆黒のオパールが嵌めこまれており、ひと目で魔法の品と推測できた。

「困ったもの、か。それですむのか？　人妖族はこの戦そのものに長いこと反対し続けていて、お前の弟子の口車でようやく協力を取り付けたんだろう？　それが戦死したとあっては、これ以上の協力は望めぬどころか、内部に亀裂を抱えかねんぞ」

ナガルフォンの足元から酒盃を煽りながらそう言ったのも、また異形の女だった。まず目が行くのはその腕と脚だ。両の腕は細い体に不似合いに太く、鍛えあげられた筋肉に覆われていた。脚も同様である。そしてその肌の色は赤く、黄色の筋がいくつも縦横に走っ

ている。
赤虎族(しゃっこぞく)である。言葉遣いからも分かる通り彼女はナガルフォンの配下ではない。むしろ監視役という方が正確だ。しかし監視はとうに諦めていた。この策士は望みさえすれば彼女の目の前で気付かれずに十名の部下に別々の密命を与えうるのだ。

「協力が得られなくなるのは問題ありません。一番欲しかった手駒はメイリア君でしたからね。揉めるつもりなら優先的に内外から圧力をかけ鎮圧しましょう。私が失ったのは実質、メイリア君という優秀な駒ひとつなのですよ。いや、惜しいことではありますがね」
「駒か。やはりお前は好かん」
「好かれることなど物心ついた頃には諦めておりましたので、私を傷つけようと思うなら別の言葉をお使いになる方がよろしいかと。やはり問題になるのは、間抜けが誘い込んでくれたあの魔術師たちでしょうねえ……つくづく余計なことをしてくれる」
「その間抜けだが、また殺すのか？」
「利用価値がなくなれば、ですね」
「フン！　とりあえず、次はどうすんだ？」
「待ちつつ、策を練りましょう。人間たちはこちらの苦労など、考えてもいないのでしょうね。力を使いすぎずに制圧する難しさ。いやはや、面倒な譜面ですよ……」

＊＊＊

ヴァンと仲間たちが近づいてみると、広場は人ごみで溢れかえっていた。泣いている赤ん坊が母親にあやされている。老婆たちはぶつくさ話しながら無理に前に進もうとしている。賭けを取り仕切る者たちと物売りたちが声を張り上げているが、喧騒にかき消されて何を言っているのか聞こえない。
途中まで人ごみをかき分けて進んでいたが、いつ途切れるとも知

れないので痺れを切らし、ヴァンはひとりだけ飛翔の呪文で上空に舞い上がった。歓声が上がる地上を見下ろせば、呆れたことに広場の中心付近に申し訳程度の空白地帯があるのみ。直径にして五メートルそこそこか。

その中心部に降り立つ。そこにはすでにムゼッカの姿があった。

「やっと来たな」

「来たはいいんだが、この狭い隙間で戦えってのか？　オレに不利すぎるだろ。なんとか動ける範囲を広げてくれよ」

「オレにも無理な相談だ。大声で訴えたらどうだ？」

「まったく……そもそも声が届かないだろ。魔術で無理を通すぜ」

ヴァンはまず薄く光る物理遮断結界と、それに重ねるように魔法遮断結界を空白地帯の中に張った。そして結界内にさらに新しい結界……歪曲結界を張った。

ぐんと、結界の内部が引き伸ばされる。五メートルほどの空白は今や百メートル近い広場になっていた。外部から見ると見たい位置だけが拡大されて見える仕組みだ。それ以外の部分は小さくなったように見える。

「後は歓声で聞こえない鐘の音についてだが、アベル師に頼んで鐘と同時に落雷の呪文を使ってもらうことになってる。それまであと一時間弱か。のんびり待とうぜ」

「手際がいいじゃねぇか。それにいろいろと吹っ切れたと見える。ま、そうでなくちゃつまらねぇ。楽しませてくれよ」

「そんな余裕があればこそ……。どうなるかなんざ分かんねえよ」

ヴァンは広くなった戦舞台の片隅で地面に寝転んだ。だから上空の異変にいち早く気づいた。寝そべるヴァンと立って腕を組んでいるムゼッカの姿が空中に映し出されているのだ。

「あれは……投影の呪文か？　一体誰が……？」
（ほっほっほ。儂じゃ）

唐突に心話で話しかけられて心臓が跳ねる。

「アベル師！　な、なんですかあれは！？」
（戦いが皆によく見えるように、ちと余計なことをしてみた。皆が見ておる。思う存分戦うがよいぞ）
「はぁ……」
「爺いだな。面白ぇこと考えやがるな。……よし、なあヴァン、声を響かせるような魔法はあるか？　あるならオレの声をでかくしてくれ」
「……分かったよ。かけたぜ」

言って耳を抑える。

予想通り、拡声の呪文の効果を確かめもせずにムゼッカは叫んだ。それは雷鳴かと思うほどの轟音になって周囲を文字通り振動させた。

「おめえら、よく集まってくれたなぁ！　っと、でかかったか？　悪りぃ悪りぃ、加減が分かんなくてよ。さて、これからの勝負について少しばかり説明しとこうと思うんだ。貼り紙を見た連中は知ってるだろうが、命知らずにもこの魔術師ヴァンは、里の英雄ムゼッカ様を挑発し、勝負を申し込んできた！」
「ムゼッカ様～～～！」
「ヴァン・ディール！　惚れるぜ～！」

大歓声を浴びてムゼッカはますます調子に乗ってきた。

「そこでムゼッカ様は、この万能魔術師とやらに賭けを持ちかけた。

ヴァンが勝ったら、ここで叶う望みならなんでもひとつ叶える。だが負けたら……」
「話が違うだろ！」
当然だが、上半身を起こしてのヴァンの訴えはムゼッカにすら届かない。
「ライチと夫婦（めおと）になるってぇ条件だ。どっちも切実な願いだ。オレたちはこれから――全力で闘うことを約束しよう」
悲鳴混じりの大歓声が里を満たす。どうやらライチを密かに想っている若者は少なくないらしい。
「そういうわけだから、賭ける方を取り替えるなら今のうちだぜ。あと一時間もせずに空見が帰ってくるだろう。アベル爺いの雷が鐘の音を伝えたら勝負は始まる。それまで楽にしてな！」
不遜な態度で地面に寝そべり直し、ヴァンはこれからの戦いを頭の中で何度も想定してみた。
初手のいくつかの可能性からありうる展開、危機的状況への対処から勝利の仕方まで、あらゆる角度から検証する。
絶対とは言えないが、考えられる限りの状況は考えぬいた。そして巨石柱……地上へ連なる長い大階段のある巨岩の柱から人間が降りてくるのを全知で調べつつ待つ。
ほどなくして空見が巨石柱を降りてきて、里に入り鐘楼に登った。じりじりする時間の中で心臓の高鳴りを感じる。
（いよいよだな。あと三段……登り切った。一息ついて、鐘楼の縄に手をかけて、鐘の音が届けば、アベル師の雷撃だ。ムゼッカを捕捉。転移の準備はよし……鐘が鳴らされた！）

＊＊＊

少し遅れて、派手な稲妻が結界に落ち、その表面を滑り降りた。ヴァンはムゼッカが突っ込んできたら即座に瞬間転移するつもりだったが、ムゼッカはゆっくり歩み寄ってきて小石をひとつ拾い、こちらに投げつけてきた。

ヴァンは全身をバネのようにして跳ね起き、その石を掴みとった。

凄絶な笑みを見せるムゼッカに不敵な笑みを返す。

これだけでも観客の歓声が増していた。

（ここからだぜ。今からそんなに盛り上がってていいのかよ？）

ヴァンも体の奥底から興奮が沸き上がってくるのを感じていた。

ムゼッカがそれまでと変わらぬ歩調から一気に急加速し、距離を詰めてきた。

転移で背後を取る。その距離およそ二十二メートル。

背を向けたムゼッカの右手から光る筋が伸びていた。その先端の矢じりのような鉄塊が、ヴァンの眼前を通過しつつ弧を描いてムゼッカの元へと帰っていく。

（昨日のあいつの戦術を使うことはやはり読まれていたか。で、あれが予告してた武器ってわけだ。鋼線の先に刃か。射程限界は約二十メートル）

ワンドを出し、ひと振りして槍に変えてから牽制に光の矢を放つ。ただしその数は三十を優に超える。計算しつくされた時間差と軌道で放たれる光の矢。ムゼッカはその軌道の隙間を走り抜けてきた。わざと残した隙間の出口付近に、透明化した擬水妖（ぎすいよう）を置いていたのだが、あっさり看破されて飛び越えられる。もう一度転移で距離を

取る。

（擬水妖に包まれてくれたらいろいろと楽だったんだがなあ。ま、予想はしてたけどな）

擬水妖の透明化を解除し、飛散させて闘技場一面に多数の小さな水たまりを作る。当然ムゼッカはこれに警戒する――と思ったら思い切りそれを踏み、撥ねさせて走ってきた。

（マナを乱されたらもう操れないことを知っていたのか？　それともただの偶然か？）

考えている場合ではなかった。踏まれなかったすべての水たまりを変質させ、十八体の水の友を創りだす。風の友と同じ最下位の精霊である。そしてそれを密集させた地点に転移し、またもムゼッカの視界の外へ。

眼前の水の友がまとめて三体、はじけてただの氷と水に変化させられた。ムゼッカの遠距離武器である。

（や、やりづらい……！）

的確にこちらの戦術の弱点を突いてくる。ヘインの圧倒的な体術、膂力、直感に対し、ムゼッカは飛び抜けているのが状況把握と対処の的確さだった。

ムゼッカが長い針をまとめて投げつけてきた。正確に八体の水の友を狙っている。すべての針に支配の呪文を試みる。三本の針をうまく呪文で捕まえた。

その三本を水の友をかする軌道で旋回させ、ムゼッカを自動で襲わせようとしたとき……顔面めがけて真っ直ぐ飛来する第九の針を発見する。他の針の陰で死角を作られていたのだ。とっさに左手で

かばうしかなかった。深々と刺さる針。全知で調べるが、毒の類は使われていないらしい。となると……。

（見失った！　まずい、来るぞ！）

背後から飛んできた鋼線つきの刃が、針の刺さっている左手に絡みついた。一瞬だけ血飛沫が飛ぶが、水の友を破壊したときの影響で冷却されているため、たちまち手に張り付き出血も止まる。引っ張られ、体勢を崩す。痛みのために耐えて踏みとどまることができないのだ。さらに体勢の崩れは呼吸の乱れにつながり、無詠唱の呪文を唱えることすら一瞬、困難になる。

その一瞬で、ムゼッカはすぐ背後にいた。

「辻風、木枯らし」

呟きながら両手のひらを背中の肺のあたりに当てられた瞬間、体内のマナがかき乱された。

「げほっ！　が……はっ、……は、ぐあっ！」

効果は呼吸困難となって現れた。そのまま倒れるが、ムゼッカは悠然と立ったまま、追撃の構えも見せない。鋼線も木枯らしを使う寸前に手放したままだ。

（もう……勝った気でいるのかよ！）

ヴァンは風爆の呪文をムゼッカとの間で炸裂させた。一瞬にして圧縮された空気が爆発を起こし、衝撃波を伴って周囲のものを吹き飛ばす――すなわち、ヴァンとムゼッカと水の友を。

ムゼッカも虚を突かれた様子で少し飛ばされてたたらを踏んでい

る。そこを支配しておいた針に襲わせるが、これは避けられた。
自分も爆風で飛ばされ這いつくばったままで起影独立と感心逸らしを使う。

「てめえの幻を作ったわけだ。悪いがすぐに壊しちまうぜ」

ムゼッカは言うが早いか分身の首を斬りつけていた。分身が音もなく消える、次の瞬間――
轟音と共にムゼッカの上に黒い稲妻が降ってきた。

「よ……余裕……なかったが……これ……で……決着……だ……」

ムゼッカは虎ほどの大きさの黒い獣に押し倒されていた。首の後をしっかりと噛まれているが出血はない。だが、重心を抑えこまれて身動きがとれないのは明白だった。ナイフを逆手に持ち替えて黒双牙の首を狙おうとした。関心逸らしが解除されるのも構わず槍で貧弱な武器を弾き飛ばす。立ち上がると、ムゼッカは次のナイフを出すことを諦めたようだった。呼吸が落ち着くまでじっくり待ってから起影独立を解除し、説明する。

「そいつは黒双牙（こくそうが）。扱いにくい雷獣だ。オレがひとつ命令すりゃ、あんたの首をへし折るぜ？」
「ケッ、両方とも幻とはな……やられたぜ。オレの負けだ」
「終わりだな。じゃあ少し待ってくれよ」

ヴァンは二十メートルほど走って離れると、黒双牙に命令の解除を伝えた。その瞬間、黒双牙はヴァンに稲妻の速さで襲いかかった。再び黒雷が落ちる。二体目の黒双牙に一体目を攻撃させたのだ。
そのままさらに少し距離を取り、槍鼠（やりねずみ）の呪文を使う。黒双牙たちの周囲五メートルほどの地面から無数の岩石の槍が空中へ飛び出し、

一斉に中心めがけて殺到した。組み合って戦っている黒双牙たちの息の根を止めるに十分な威力の範囲魔法だった。

「手こずらせてくれるぜ……」

ヴァンは拍手と歓声で一際高く盛り上がった観衆に、右拳を突き上げて応えながら独りごちた。

一・美味しかった

拍手と歓声と興奮は時の経過と共に少しずつ落ち着いていった。
その中で、ヴァンは自分の名を大合唱する声を聞いた。それは怨嗟や呪詛でもなんでもなく、純粋な敬意と親しみ、それに祝福の合唱だった。強き者を是(ぜ)とする里の風潮によって、人々のヴァンに対する評価が不信から好感へと変化したのである。
一方で、ムゼッカの名の大合唱も起きていた。敗北はすれど良い戦いを見せ、一度はヴァンを窮地に追い込んだ里の英雄の人望は不動のもののようだ。
不意に魔法で拡声されたキ・ハの声が聞こえた。

「見事な勝利でしたね。おめでとう、ヴァン。あなたに長老会からの賞品を用意しているわ。受け取ってちょうだい」

結界を解除してからキ・ハを探すと、アベルの隣に立つ老婆の姿が目に入った。巻きついた鋼線を外し、貫通している針を抜いて治癒の呪文で傷を塞ぐ。
歩み寄ってキ・ハの前に立つ。その様子は上空の投影の呪文でも映されていた。
老婆は祝福の言葉を述べながら鳥の尾羽根のような形をした土気色の草を差し出した。高さ三十センチほどの大きな草だ。

「これは……もしかしてベヒーモスの尾なのか！？」
「博識ね。その通りよ。地のマナの豊富な場所にしか生えない、魔力を宿す草よ。魔術師のあなたなら使い道も分かるでしょう？」
「いくつもの用途がある薬草だ。いや、霊草と呼んだ方がふさわしい。いいのか？」
「ええ。疑問もあるでしょうけど、それは後で。今は受け取って」

「ありがたく頂いておく」
小声でキ・ハが付け加える。
「夕食に呼ばれているの。ムゼッカの家で話しましょう」
「ああ。聞きたいことがたくさんある」

頷くとキ・ハは背を向けた。傍らに控えていた虹使いらしき少女が振り返って手を高く上げると、群衆が割れて道ができた。そこを通ってキ・ハと少女が出ていく。どうやらお付きらしい。
里の民たちも三々五々帰り始めた。ヴァンはムゼッカと共に広場から人が減るのを待つことにした。

「あー、やられたやられた。あんな奥の手を隠してやがったか。おっかねえ魔法だぜ。しかし実戦で役に立つのか、あれは？」
「実戦じゃ怖くて使えないさ。敵が単独だったとして、援軍が来ないとも限らない、乱入がないとも限らない、それが黒双牙に対処してるときだったらたまったもんじゃないからな」
「命令をひとつ終えるだけでお前さんに襲いかかってくんだろ？」
「そういうこと」
「なんであんなもん覚えたんだ？」
「師匠に命令されて渋々、だよ。戦闘の訓練にちょうどいいから、とさ。けど、それが役に立った」
「同じ奴に襲わせるのはうまい手だったな」
「初めて師匠にあれを見られたときは地形が変わるくらい攻撃魔法撃ちこまれたけどな」
人は次第にまばらになってきた。ライチとヴァンの仲間たちが近づいてきた。

「先生すごい！　ムゼッカさんに勝っちゃったね！」
「お見事な戦いでやした！　最後に出てきた獣がよく分からなかったでやすが」
「ああ、あれは……」

説明に聞き入るホッグとパティに視線を向けたまま、ヴァンの意識は少し離れて見つめているルーシャのことでそぞろになっていた。
と、ルーシャが近づいてきた。表情は読めない……ヴァンは内心で冷や汗をかきながら、ルーシャが言葉を発するのを待った。

「ヴァン……」
「お、おう。なんだ？」

数秒の沈黙が何百倍にも感じられる。恐る恐るルーシャの目を見た。
その目は――笑っていた。

「……おめでとう。これであたしも、修行に専念できる」
「へへ……ありがとよ。修行、しっかりな」
「任せといて！」

パティは目をしばたたかせている。

「修行？　ルーシャさん、何か修行するの？」
「おうさ！　オレの辻風を叩きこむんだよ」
「すまんパティ。王都に行くのは少し遅くなりそうだ。時間がかかりそうならオレとパティふたりだけで向かって、話をつけて預けることになるかもな」
「心配すんな。時間はかけねえさ。辻風は基礎の型さえ身につければ、あとは発想次第でいろいろな使い方ができるからな。型だけ教

えておしまいってわけよ」

その言葉にヴァンは穏やかならざる感情を呼び起こされた。

技を教えるのに型からというのは合理的ではあるが、そもそも誰かに短期間で覚えさせるという目的がなければ、自己流の戦闘術に型など考案しておく必要はないのだ。

ムゼッカは自分の死が近いことを悟っていて、辻風を覚えやすい型に落とし込んだのだろう。恐らく書物か何かに残すつもりだったのだ。

「さぁて、オレたちもそろそろ帰ろうぜ。すっかり人もいなくなったしな。これで夕陽でも射してりゃ感傷的な雰囲気も出るんだがなあ。つくづく気の利かねえとこだぜ、地底ってのはよ！」

急がねばならない。その思いがヴァンを捉えて離さなかった。この達人が無事なうちに、隠れ里の平和を確保し、謎のままのムゼッカの目的も達成せねばならない。

「ムゼッカ、話が終わったらオレはすぐ動くつもりでいる。問題ぜんぶとは言わないが、あんたの心配事はみんな掃除するくらいのつもりでな。だから、それが終わったらさ……」

「読めたぜ、ヴァン。何を言おうとしてるか、だいたいな。だがそういう台詞は、いいとこまで取っときな！」

言って歩き始めてしまう。

苦い笑いを浮かべるヴァンを、皆が不思議そうな面持ちで見つめる。

「どうしたの、ヴァン？」

「いや……爺さんにゃ敵わねえなって思っただけだ。さ、行くか」

帰途に着く一行を、夕刻に似つかわしい一羽の烏が見送った。

＊＊＊

地上であれば完全に陽が沈み、やせ細った月が星々と仲直りして漆黒の天空に輝く頃。ヴァンたちはようやく食堂に呼ばれた。そこに待っていたのは、ムゼッカ、アベル、キ・ハ、なぜかルーシャ、ライチ、それにライチが腕によりをかけて作った料理の数々だった。

その量は大人が二十人でも食べ切れないのではないかと疑いたくなるほど。品目は地底特有と思しき見慣れないものから、慣れ親しんだ地上の料理まで、ホッグも数えるのを諦めるほど多種多様だ。肉なら鶏、山羊、牛、魚が揃っているし、調理法から言えば煮付け、塩焼き、酢の物、和え物、揚げ物と揃い踏み。もちろん野菜や果物も豊富に使われている。食べ物に無頓着なヴァンもこれには感銘を受けざるをえなかった。

「来たわね、今日の主役が」

「ヴァンよ、見事な戦いじゃったぞ」

ふたりの長老に続いて、ライチが笑顔で口を開いた。

「ごめんなさいね、すっかり遅くなっちゃった。ヴァンさんに賭けていた人たちが勝って手に入れた食材を持ってきてくれたから、品数を増やしたらなかなか終わらなくて……」

「驚きなさいよ。このルーシャさんも手伝ったんだから！」

「本当かよ……ルーシャ、料理できたっけ？」

「ふふふ。ライチのお陰で今回は完璧だから、食べて驚きなさい！」

「ちょっと苦労しましたけどね。でも助かりました」

「おうおう、さっさと座っちまえよ。いつまで経っても食えねえじ

ゃねえか」
「おっとすまない……」

全員が座るとムゼッカは杯を持った手をヴァンに向けた。

「さてと、乾杯の音頭はヴァン、頼むぜ」
「分かった。……今回はオレの郷里のやり方に合わせてもらおうと思う。勝者と敗者が同じ料理を囲むわけだから、乾杯の後は食べ終わるまで無駄話はなしで頼みたい。じゃあ、乾杯」

静かな乾杯の唱和。しかしヴァンは、共有心話を全員にかけて、心話で続けた。

（悪いが今のは嘘だ。共有心話をかけたからこっちで話したい。万が一にも敵の耳に入るようなことがないためにな）
（おいおい。何をそんなに慎重になってやがんだ？）
（賭けに勝ったんだから、話してくれるんだろ？）
（そっちか。気が早えぇ奴だな）
（今晩にでも動き始めようと思ってるんだ。時間が惜しい）
（ヴァン、その前にあたしたちからいいかしら？　あなたに言っていなかったことがあるから、すべて話しておきたいの）
（まあ、順番の上でもその方が混乱はなかろうの）
（もちろんかまわない。オレも疑問があるしな。例えば、ベヒーモスの尾とか）
（儂から話すかのう。先日は誤魔化したのじゃが、妖魔族が総力で里に攻め込めぬ理由を説明する。ベヒーモスの怒りを恐れておるのじゃ）
（魔獣ベヒーモスか。地の大精霊でもある。だよな、キ・ハ？）
（ええ。長老の家の裏手の洞窟、あの奥がベヒーモスの巣よ。ベヒーモスの尾もそこに生えるの。ベヒーモスの力でこの大空洞は安定

した状態にあるのよ。一度、怒り狂ってしまったら大空洞は滅茶苦茶になってしまうでしょうね。妖魔族の集落も無事ではすまないわ）
（なるほど。それが敵の手が緩い理由か。派手にマナを使いすぎるとベヒーモスを刺激することになりかねないってわけだ）
（そうじゃ。そして、より気をつけねばならぬ理由というのがあっての。今ベヒーモスは常の状態ではないのじゃ）
（どういうことだ？）
（そこからはオレの話だな。ちょいとばかし長げえぞ。あれはライチが生まれる少し前だから二十二年くらい前か）
（あたしの歳は十八だから、誤解しないでね）
（そのころオレは遺跡潜りをしていた。仲間はヘインと……）

＊＊＊

時は二十二年ほど遡る。
ヘインとその仲間は大陸随一の遺跡潜りだった。ただし、その名はほとんど知られていない。
戦士ヘイン、業師ムゼッカ、魔術師クラメル、虹描きウィル、魔酒造りネルドファの五人だ。
ちなみにすべて偽名。彼らが名を知られていない理由はここにある。本名を隠し、定期的に偽名を変えながら活動していたのだ。

彼らの成し遂げた偉業は枚挙にいとまがない。マーヴァルや隣国の国家的危機を救ったことが三度、凶悪な魔獣を討ち果たしたことも七回に及ぶ。そのうちには二匹の成長したドラゴンも含まれている。
もちろん邪教集団、盗賊団など、人間をも多数、敵に回してきた。名を変え続けたもうひとつの理由だ。報復を恐れてというよりは、報復が面倒だから、という理由だが。

「ムゼッカ～、お帰り～。どうだった～？」
「あんまりくっつくなネルドファ、おめえはいい女だが酒の匂いが移る！　クラメル、あんたの言うとおりだったぜ。あのフランクって豪商、相当でかい組織の末端だ」
「そうであろう。大陸規模の勢力があるはずじゃ」
「そこまでは分からなかったが、歪んだ天秤ってのが組織の通称らしい。主要な構成員は全員が商人。こんな集団があるとはな！」
「商人だろうが貴族だろうが変わりがあるか？　頭を潰せばそれで片が付くだろう」
「分かってねえなヘイン。奴らは全員が幹部の椅子を狙ってるんだ。空席はたちまち埋まる。これまでの相手とは質が違うんだよ」
「うーん、僕はヘインに同意だな。そういう奴らなら、幹部になりたいって思いの方をくじいてから幹部を潰せばいいんじゃない？派手な脅迫でもしてからさ」
「相変わらずウィルは過激～。ネルドファはそーゆーの、嫌いじゃないぞ！」
「そうじゃの。基本方針としてはウィルの考えどおりで、様子を見ながら必要な措置を講じていくということでよかろう」

一度動き始めると、彼らの仕事は早かった。二ヶ月後には最高幹部三人の内、ニーズに本拠を持つコイルという男を追い詰めにかかっていた。
コイルは魔術師でもあり、瞬間転移の呪文でヘインたちを広く薄暗い洞窟に運んだ。そこにはコイルの精鋭私兵たちが待ち構えていたが、それよりも座して人間たちを見下ろしている洞窟の主の方が問題だった。

「べ、ベヒーモス！？　ここ、ベヒーモスの巣だよ！」
「おいウィル！　ベヒーモスってな何だ？　あの馬鹿でかい獣のことだってのは分かるが。あれも敵か？」

「絶対攻撃しないで！　刺激しても駄目！　あれは地の大精霊だよ！　ドラゴンと同じかそれ以上に強いんだ！」
「それだけではないぞ屑ども。ここは人の住む地下空洞だ。こんなところでベヒーモスが怒りに任せて力を暴走させたらどうなると思う？」
「空洞全体が崩壊すると言いたいのじゃな？　自分も含めて多数の人間を人質にするとはどこまでも性根のねじ曲がった奴よ！」
「ムゼッカ、雑魚の半分を任せる。残りを殺してからオレがコイルを仕留める」
「逆だ馬鹿ヘイン！　雑魚は半分ずつだな。いいぜ」

ヘインたちの戦いはあっけなかった。全員がそれぞれの技を極めた遺跡潜りなのだから、こと戦闘でそうそう遅れを取ろうはずがない。ヘインとムゼッカは同時に武器をコイルの急所に突き立てた。その瞬間にコイルは瞬間転移でベヒーモスの首の上に転移していた。しかしおびただしい出血は、明らかに致命傷を負ったことを物語っていた。

「うおおおあ！　終わりだ屑ども。私も死ぬが貴様らも道連れにしてくれる！　この狂気の卵でな！」

コイルは懐から取り出した禍々しい紫の光を放つ宝石をベヒーモスの首に押し当てた。するとそれはベヒーモスの体に埋まっていき、ベヒーモスは激しく苦しみだした。
暴れるベヒーモスの上で瞬時に石となったコイルは落下し、土の上に落ちて粉々に砕け散った。

「まずい！　あれは精霊には特に効果があるみたいだ！　ベヒーモスを発狂させるつもりだ！　僕が抑えてくる！　クラメル、反発力を強める呪文と転移をお願い！」

クラメルのふたつ目の呪文でウィルはベヒーモスの首に取り付いた。そして必死に精霊語でベヒーモスをなだめる。ベヒーモスが沈静化するまで恐ろしく長い時間がかかったように思えた。

＊＊＊

（あの時は本当にびっくりしたわ。折も折、ちょうど妖魔の侵攻の最中だったの。大精霊の洞（ほら）に侵入者がいると聞いて、てっきり妖魔族だと思って精鋭の小隊を率いて入っていったらそんな場面に出くわしたんですもの）

（結局どうなったんだ？）

（狂気の卵はな、孵らねえようにウィルが魔力とマナを犠牲にして封印した。だが完全なものじゃねえって言うからオレがここに残ることにしたんだ。まあ、三幹部をぜんぶ始末してからだがな）

（じゃあ、おじさんが里の英雄になったのってそのときじゃないの？）

（いや、その場でキ・ハと事情を説明しあって、ならオレがってことで敵の大将を倒しに行ったんだ。居つくのは他のふたりを殺った後だから、少し間が空いたけどな）

（ヘインがニーズ付近にいたのはもしかして……）

（あー、だろうな。歪んだ天秤の挙動を調べるためだろう。山賊なら行商を襲っても不思議じゃねえが、もう少しマシな方法はなかったのかあの馬鹿……）

（疑問はだいぶ解けてきたな。あとは妖魔族の遺跡探索についてか）

（それについては儂らも本当に分からんのだ）

（まずそれから当たるかな）

（ねえ、話は終わった？　もう声出していい？）

（ああ、いいぜ）

「ぷはー。美味しかった！」

ルーシャのその声に、忍び笑いがひとつまたひとつと漏れ、それは徐々に大きな笑いへと変化していった。

二・ただいま

二・ただいま

涙を流すことをやめた雲は太陽に謝ろうと思っていた。
ひとまず夜のうちに空の半分を解放し、太陽に玉座に戻ってもらおうとしたところで、やせ細った月の挨拶を聞いた。
半泣きを誤魔化しながら挨拶を返す。優しげに目を細めた月は、太陽が目覚めるまでの話し相手として申し分ないように思えた。
星々は安堵しつつ、ふたりのたどたどしい会話に耳をそばだてていた。

＊＊＊

ヴァンは遺跡の入口から外に踏み出しながらひとりごちる。

「久々の地上か。そうだよな、これが本当の夜の空気、夜の世界だ。新月が近いか。そういや、強化系呪文の類の効果が消えるのは明日辺りか……いや、明後日の深夜だな」

急がねばという思い、そのためにヴァンは身体賦活が切れるギリギリまで無理を通すことにしたのだった。薬を使って休息不要の状態を維持し、寝ずに活動する。

ヴァンが出てきた遺跡は巨石柱の階段に沿って飛行の呪文で飛んで着いた建造物だ。地上部分は大きな神殿のような造りになっている。神像や絵画が飾られていたと思われる場所には何もないため、何の建物だったのかはもはや推測するしかない――というのは、全知を使うほど興味を惹かれなかったためだが。

教えられたとおりに右側に注意しつつ少し歩くと、明かりがかすかに漏れている廃屋が見つかった。屋根に穴が開いた家屋跡。
壊れて開かないように偽装されている扉を一回、三回、二回と拍子を取って叩く。中から若い声が返ってきた。

「立ち去れ。ここには何もない」

符丁である。何者か、用件は何かと聞いている。ひとつだけ符丁を混ぜて、後は普通に答える。

「熊を追っていて道に迷った。里のムゼッカの客でヴァンと言う。妖魔族の話を聞きたくてきた」

扉を開けたのは、猫のような好奇心と蛇のような警戒心を瞳に宿した青年だった。背が低くて童顔なので少年と間違えるものもいるかも知れない。

「話は聞いてるよ。ムゼッカ様との勝負はどうなったんだい？　まあ、その前に入ってくれ」

中に入る。まったく生活感のない空間に見せかけた部屋を抜け隠し扉を通ると、天井に大穴の開いた部屋に出た。ここにはひと通りの生活用品……寝台、暖炉、湯沸し、鍋などが揃っている。臭い消しの香木の横で乳白色の鍋物が煮立っている。それをゆっくりかき回しているのは少女のようにも見える小柄な槍使いだった。

「お客さんだね、乳汁と鶏肉の煮物はどうだい？　今日のはよくできてるよ」
「それじゃ悪いが少しいただくか。汁は少なくていいから肉と野菜を適当に盛ってくれ」

「聞けよイオ、ここにいるのは身の程知らずのヴァン・ディールだぜ！　勝負の話を聞かせてもらおうじゃんか」
「へぇ！　あんたがそうなのか。でもわざわざ地上まで来るんだ。何か大切な用事があるんじゃないかな？」
「そういうこと。あまり時間をかけたくないから勝負の話は簡単にすますぜ。何度も負けそうになったけど最後の最後で逆転勝ちした。おっと、ありがとさん。少し冷めるのを待って食わせてもらうぜ。熱いのは苦手でよ」

手渡された煮汁の皿を床に置き、自分も床に座る。どうやらここで使われていたであろう椅子もすべて壊されていて残っていないらしい。さっきの神殿のような遺跡もそうだったので、ここの遺跡全体に言えることかも知れなかった。

「ロビン、早速だが妖魔族を追跡した時の話を聞きたいんだ。なるべく手短に頼む。詳しく聞きたいとこは質問を挟むから」
「やけに急いでるな。まず見つけたきっかけは……」

ロビンの話をまとめるとこうなった。
外に用を足しに行ったときに妖魔族の言葉と複数の足音が聞こえてきたので物陰から観察すると、七匹の妖魔族が連れ立って歩いているところだった。言葉は断片的に理解できたので彼らが何かを手に入れるために地上に出たと分かった。
急いで相棒に、ひとりで追跡することだけ伝えると、気配を消して尾行し第二要塞遺跡に入るのを見た。出てくるのを待つか迷ったが結局中に入っていき、罠や魔物を解除・撃破していくつもの部屋を回るのを見、最終的に二階の広い部屋で旗のようなものを安置場所から取り出すのを目撃。直後に発見されて追いかけられることとなった。
そこから逃走の話になろうとしたのでヴァンは話を止め、その旗

のあった部屋のことと第二要塞遺跡の場所を詳細に尋ねた。
「間違いないな。その旗だ。置いてあった場所を調べてみればその働きも分かるだろう……全知じゃ分からなかったからな。たぶんこいつは隠蔽型の呪文で妨害されてるんだろう。話と鍋をありがとよ。来たばかりだが行ってくる」
「ヴァン・ディール、あんたが何をするつもりかしらないが、ロビンはあんたの味方だぜ。手伝えることがあったら遠慮なく言ってくれよな」
「そのときは頼む」
誇らしげなロビンに笑い返して、ヴァンは空見の小屋を辞した。

＊＊＊

「先生だいじょうぶかなー？」
パティは寝台の上で寝返りを打ってルーシャの方を向きながらそう言った。
「万能魔術師に心配は無用。何食わぬ顔で帰ってくるって！」
「万能魔術師なんていないってアベルお爺ちゃんが言ってたよ？」
「そりゃそうよ。だってただのあだ名だもん」
「あだ名なの？」
「ヴァンは幼い頃から魔術が得意で、その上でおせっかい焼きだったの。困ってる人がいたらじっとしてられないって感じでね。で、いろんな厄介ごとに首を突っ込んでは、魔術で強引に解決したりしてたんだけど、面白くないのは同じくらいの歳の子供たちよね。で、万能魔術師ってあだ名を考えて広めることにしたの」
「褒め言葉みたいに聞こえるけど、なんでそんなことしたの？」

「ちょっと困ったふりをすれば勝手に魔術で解決してくれる便利な奴って意味なのよ。その噂が広まったら、困った人がヴァンの屋敷に押し寄せたわけ。それ以来、ヴァンはおせっかいを焼くのを我慢するようになったの。よっぽど家族に咎められたのね」
「詳しいよね、ルーシャさん。先生とは幼なじみなの？」
「うん。でも、その頃は仲違いしててね」
「え？」
「万能魔術師って呼び名を考えたの、実はあたしだったりして」

パティが吹き出すと、ルーシャもつられて笑った。

「ねえパティ、呪文の練習はどう？」
「ぜんぜん駄目だよ。石が少し転がるだけで、飛んでいってくれないの。ルーシャさんの修行は？　ちょっとだけやったでしょ？」
「やったことの意味が分からなかった。おじさ……師匠は、今はそれでいいって言ってたけど……」
「先生が見てくれてたらな～」
「そうね。何をあんなに急いでるんだろ？　何か隠してるのは間違いないんだけど……」
「キ・ハ様なら何か知っているかもしれませんね」

口を挟んだのは瞑目したままの女虹使い。歳の頃は二十代前半と見えた。ふたりとも彼女の名前を知らないので、単に虹使いさんと呼んでいた。

「寝てると思ってた。あ、もしかして起こしちゃった？」
「いえ、起きていました。マナを探るには目を瞑っていた方がやりやすいのです。お気遣いに感謝します」
「あ、そういえばあたしね、虹使いじゃないけど、ノーム使ったことあるよ」

「ええ！？」

思わず目を開ける虹使い。その瞳は鮮やかな青だった。

「そんなことができるのですか？」

「まあ、魔術で作った道具を使って、だけどね」

「なるほど……そういうものがあるんですね。……でも、少し悔しいです。確かに虹魔法は、魔法のうちでもっとも原始的で簡単なものとされていますが……」

「そうなの？　魔術より簡単？」

「パティ、虹魔法を教わった方がよかったとか思ってる？」

ルーシャがいたずらっぽく尋ねると、パティは口を尖らせた。

「だって、文字って難しいんだもん……」

「確かに虹魔法なら文字の勉強もいりませんね。ほかの魔法にない特長もあるんですよ」

「どんなの？」

パティとルーシャの声が唱和した。

「例えば攻撃呪文の質が違います。魔術で作り出した炎は純粋に魔法的な存在です。ですから裏切り者の鎧のような魔法を無効化する能力で完全に防がれてしまいます」

「虹魔法は違うの？」

「虹魔法の炎などは、半分は実体なんです。残り半分は魔法ですからあの鎧で効果が弱くなりはしますが、普通の炎の特性もあるので、鎧を熱したりして有効な攻撃ができるんです」

「じゃあ、倒れ石とかも？」

「はい。有効ですよ。それにしても、倒れ石まで使えてしまうんで

すか。割と高度な呪文なんですよ」
「使い手の精神的な強さが影響するとか言ってた」
「……ルーシャさんがすごい人だと解釈することにします」

苦笑交じりに虹使いが言うと、ルーシャは機嫌よく笑った。

「先生の相棒だもん！　ルーシャさんはすごい人だよ！　ムゼッカさんの技でもっとすごくなるよ！」
「うん。あいつを見返すくらい強くなるからね！」
「……そのヴァン様の隠し事ですが、キ・ハ様に尋ねてみますか？　私も気になっているんです」

その口調の真剣さに、ルーシャも考えこむ。

「虹使いは勘がいいって話よね。あたしもすごく気になるけど……」
「気になるなら行こうよ！」
「そうね。聞くだけ聞いてみようか」
「私はここに残ります。私には聞かせてくれないと思うので……。できたら、後で教えてくださいね」
「分かった」

しかし、部屋を出たふたりはさして時間もかからずに帰ってきた。虹使いが視線で問いかけると、ルーシャは首を横に振った。

「今のあなた方にお伝えすることでもありません。時期が来れば分かりますよ、だってさ」
「そうですか……仕方ありませんね」

表情には出さずに虹使いは落胆していた。教えてもらえなければそれは悪い知らせに間違いないと踏んでいたからだ。どこで知らせ

が止まったとしても。

「素直にもう寝ちゃって、明日の修行に備えようか」
「うん……ふぁ～……」
「それがいいかと……あ！」
「え？　どうかしたの？」
「ルーシャさん、広場に誰か瞬間転移してきたよ！　この感じ、先生とルーシャさんが帰ってきたときと同じだもん！」
「パティは待ってて！　あたし見てくる！」
「え？　ちょっと待ってください！」
「あたしも行くよ！」

虹使いの静止も聞かず、ふたりは部屋を出ていってしまった。彼女は立ち上がって呪文を呟く。額に円環状の虹のような印が現れて、体内に染み入るように消えていった。扉が閉じ、部屋は無人となった。

＊＊＊

砂埃にまみれたマントとローブに身を包んだ青年が立っている。マントを外して振り、砂埃を払い落としている。それから左手でマントを持ち、右手でローブをはたいている。
落とし終わると再びマントを身に纏って周囲をゆっくり見回す。いくつもの視線を感じていた。視線には警戒の色がありありと見て取れる。だが見られている当人はおかまいなしに深呼吸などしている。

「うーん、二年ぶりくらいかな？　嗅ぎ慣れた隠れ里の香り。相変わらず血の匂いが混じってる。まだ続いてるわけか」

思い直して細い髪を指で梳こうとすると、指は途中で引っかかった。青年は苦笑してから、近づいてくるマナの方へ振り向いた。

「やあ、こんばんは。珍しいね、旅の人？」

背後から近づいていたルーシャは、不意に振り返った男に警戒した。警戒を解かずに言葉を返す。

「どうして旅の人だと思うの？」

「里の民なら、正体が分からないうちに無闇に、それもひとりやふたりで近づいてきたりしないものだよ、お嬢さん。それが戦いにどっぷり漬かった人間の思考って奴なわけだ」

「やっぱりあんた、妖魔族？」

警戒を強める。

「どうだろうねえ」

薄い笑みを浮かべる痩せた青年の表情は読みづらい。

戸惑っていると、不意に周囲に気配が現れた。里の若い戦士たちと魔術師、虹使い、その中にはアベルの姿もあった。

「ただいま、父さん」

「儂の息子なら必ず持っているものを、お主は持っておらんのう」

「ああ、服の埃を払うのに邪魔だから小さくしてしまったんだった」

言うと、腰に指していた筆のようなものを取り出す。それは手の中で一秒と経たずに本来の大きさを取り戻した。木製の杖だった。

「もう少し試させてもらおうかの。儂の名前と自分の名前を問う」

「父さんはアベル、隠れ里の長老。僕はシュタイン・シュリーガー……ああ、ここを出たときはまだシュリーガーは名乗ってなかったかな。ちなみに僕は本当の子どもじゃなくて、捨てられていたのを父さんが拾って育ててくれた。まだ質問、ある？」

アベルは返事の代わりにシュタインに近づいていった。

「親不孝者め……よくもまあおめおめと……」

アベルは目を潤ませたままさらに歩み寄り、シュタインの胸を弱々しく叩いてから続けた。

「……よく帰ってきたのう。湯浴みの支度をさせる。いつもどおりでよいな？」

「ただいま。うん、水を張ってくれれば自分で温めるよ」

三・逃げるぜ

「屈辱だ……屈辱だ……」

物陰に隠れて第二遺跡の入り口を見張りながら、ギッケルはひたすら呟いていた。

「ナガルフォン殿の不興を買ったとはいえ、このような仕打ちがあっていいのか？」

落とし穴に落とせばすべてが終わるはずだった。あの高さから落ちてなお生き延びるなどと予測し得ただろうか？

「私は追跡者だ。狩人だ。獲物を探し、追い、捕らえ、時に殺すのが私の役目だ。それがどうだ？　今は誰も訪れるはずのないけちな遺跡の見張り……屈辱だ……」

唐突に、ギッケルの言葉が途切れる。言葉だけではない。呼吸も、心臓の鼓動すらも止まっている。魔術で時を停められたのだ。

「そいつは難儀だったな。オレとしちゃ、ムゼッカのところに導いてくれたお前には恩があるようなもんだから……」

ヴァンは見張りに格下げされたギッケルに盲点の呪文をかけてから言葉を続けた。

「なるべく死なないですむようにしてやるさ。いや、声で気づけてよかったぜ。あの鎧を着てたときは見た目なんざ分からなかったからな」

停まっていた時が動き出したが、遺跡にヴァンが入っていくのを、彼はただ愚痴を呟きながら見送った。

＊＊＊

精霊の灯火の呪文を唱えると、黒に包まれていた遺跡の内部が色を取り戻した。古代の血痕まではっきり映し出される。

「久しぶりだね、あたしを呼ぶの」

声の主は光源たる小さなランタンを両手で持っている少女だ。ただし、その全身は淡く光を放っており、背には蝶を思わせる羽がある。そして小さい。身長が二十センチほどしかない。

「ルーシャが白い目で見やがるからな、お前と話してると」

「あたしが幻だから？」

光っていなければ小妖精（ピクシー）と見分けがつかないが、精霊の灯火の呪文で姿を表す幻影である。どういう仕組みか、喋ったり記憶したりする能力もあるらしい。

「そんなとこだろ。問題の部屋は、方向で言うと入り口のほぼ正面、高さが二階の場所にあるらしい。妖魔たちはいくつもの部屋や通路を通ってそこにたどり着いたらしいが……分かるだろ？」

「近道が隠されてる？」

直線の通路の先は左右の通路に出て、正面が壁になっていた。その壁をしばらく見ていると、長方形に光の切れ込みが走り始める。

「ほんとにあったね、隠し扉」
「予想通りってやつだ。問題はその奥だな」
全知で調べてみると、開け方はゆっくり力を込めて押すだけらしい。あまりに簡単すぎるので罠の存在が疑われた。だが、全知では罠の存在は確認できない。
「罠はないか……もう少しマナを送るから、奥の方まで照らしてくれ」
「はーい」
緑色の光が強くなるにつれて、徐々に壁が透き通ってその向こうに続く上り階段が見え始めた。
「上の方も頼む」
「うん」
階段を少し進んだ真上あたりに蝙蝠のようにぶら下がっているものが見えた。身を縮めているが一メートル弱の大きさがあるそれは、ただの蝙蝠ではありえない。似たようなものがさらに奥まで七つ並んでぶら下がっている。
「なんだろね、あれ？」
「魔法生物と見てまず間違いないだろ。たぶん合言葉か何かを提示しないと襲いかかってくる仕組みだ」
「合言葉、分かる？」
「調べようもないだろ。強行突破する」
改めて全知で七体を調べてみる。やはり魔法生物で間違いなかった。材質は岩と鉄を魔法で融合した珍しいもの。そして、理由は不

明だが火の属性と炎熱への防護効果が付与されているのを確認した。通常詠唱で呪文を用意する。すなわち、水の鎧、そして遅延待機を施した吸精掌を十回分、見えざる拳を五回分。

「さて、お邪魔しますかね」
「派手に暴れるんでしょ？」
「その方が好みだろ？」
「大好き」

扉に体重をかけるようにしてゆっくり押す。二秒ほどで自然と開き始めた。埃の積もった隠し空間に踏み入り、そのまま階段を登る。反応があったのは中程まで登ったところだった。七体の魔法生物がまとめて落下してきた。

真上から落ちてくる魔法生物を両手で脇に押しのけるようにして避けながら吸精掌を遅延解除する。マナが手のひらから流れこんできたが……

「あんまり効果的とは言えんな。もっとまとめて吸えたらいいんだが……」
「マナの回復にはいいんでしょ？」
「相手が魔法生物でこれだけじゃなあ。青惨酒の三分の一ってとこか」

会話している間にも戦闘は継続していた。上下の遠い二体がほぼ同時に魔力の矢のようなものを撃ってきた。山なりに曲線を描いて飛来するそれらを手のひらで受ける、その直前に吸精掌。

「へぇ。これなら使ってるマナをほぼすべて吸えるか。手が痛てえのが難点だが」

吸精掌でマナを吸いながら魔法生物の上を次々乗り越える。魔法生物たちは腕を模した部位で殴りかかってきたが、攻撃は見もせずにかわせる単調なものだった。準備した十回を使い終えたが、どの魔法生物のマナも吸いきれなかった。

二度目の魔力弾が撃ちだされる。今度は手を伸ばさずに、体を球形に包み込んでいる水の鎧に当たるに任せる。鎧の表面で魔力弾は連続して弾けた。

お返しとばかりに一番上の魔法生物に見えざる拳を解放する。重い音を立てて転げ落ち、下の魔法生物を次々巻き込みつつ落下していく。そこに見えざる拳をさらに重ねる。

「圧倒的すぎてつまらないと思ってたらいい知らせ。そうじゃなきゃめんどくさい知らせ～」

「何だ？」

答えは天井から落ちてきた。濁った液体が雨のように降り注いだのだ。水の鎧の表面を滑り落ちるので浴びずにはすんだが、臭いが遮断されているので正体は着火するまで分からなかった。

細い稲妻が階段の中ほどに連続して落ちた。その近くで液体……油が赤い炎を上げ始める。

「このための耐熱処理か。確かにあの材質なら熱には弱かろう」

「もっと慌てようよ。つまらないよ」

炎は階段を流れ落ちる油の全体に広がった。熱で陽炎が発生して下の様子が歪んで見える。どうやら魔法生物たちは少しずつ体勢を立て直そうとしているようだった。硬いものがぶつかり合う音を立てつつ、重なりもつれ合った状態から立ち直りつつある。

「悪いが、そろそろ先に進みたいんでな。終わらせてもらう」

呪文を使用すると炎の色が赤から銀へと変化した。そして軋むような音が響き始める。陽炎には白い霧が取って代わった。軋んでいるのは魔法生物たちの体。動きがどんどん鈍っていく。

「何をしたの？」

「炎を変質させた。凍てつく炎にな」

魔法生物の体を形作っているのは性質の異なる金属と石。そのため冷却により急激に体積の変化をしだした金属と、ほとんど影響を受けていない石材部分が剥離を始めた。時折甲高い金属音が鳴り、魔法生物の体が原型を失っていく。

ほぼ同時に魔力弾を撃とうとした二体の魔法生物が音を立てて瓦解し、破裂した。その衝撃で連鎖的に壊れていく魔法生物たちに背を向けて、ヴァンは階段を登りきった。そのまま扉を開く。

ヴァンの横で灯火の精が階下を振り返った。最後の魔法生物が完全に砕けるのが見えた。

＊＊＊

「大当たり」

隠し階段を抜けた扉を開けるなり、目に入ったのは広い部屋だった。五十人ほどが入っても窮屈さを感じずにすむであろう長方形の扉以外の壁面には複雑な操作盤が並び、魔法の道具も手付かずで置かれたままになっている。盗難防止の措置がしてあるのだろうとヴァンはあたりをつけた。

「ここって？」

「司令室とか作戦本部とか、そんな名前で呼ばれてただろう場所だ

よ。この要塞の中心だ」

答えながら室内に目を凝らす。精霊の灯火はすぐに幻影の呪文でただの壁面に偽装された場所を見つけ出した。

「ねえねえ、何もない場所が隠してあるよ」

「それを探しに来たんだよ。何を置いてたのか、確かめにな。形は旗と分かってるんだが、実際の機能を知りたい」

旗が置かれていた場所は下面がマナ供給用の魔法陣を刻まれており、そこから太い送魔管が伸びていた。また、円柱形の透明な仕切りで防護されていて、やすやすとは触れることができないように守られている。

そして、透明の仕切りの中央に何か書かれていたらしい金属板があるのだが、その表面は刃物で酷く傷つけられていて通常なら判読できない状態だった。念入りな工作がかえって仇になり、底に書かれていた事柄の重要性を示している。

全知で傷つく前の状態を幻視し、言語の呪文でそれを解読する。

「結界旗。マナが途絶えることがないよう、左右の魔力炉は必ず片方ずつ稼働させておくこと。陥落が確実となったときには忘れずに破壊するように……か」

「結界旗？　結界を作ってたの、その旗？」

「そういうことだな。意外と楽に正解にたどり着いちまった。まあ、手こずるよりはいいか」

隠し階段と反対側の壁の上方は透明な材質の窓になっていた。硝子のようだが製法はまるで違うことだろう。星々の光を映している方に近づき、制御盤に手を置いて外を眺める。遠くに城の影が見えた。

「連中が求めているのは結界装置だったというわけだ。だがそれをどう使うつもりだったか？」
「難しいこと言われてもあたし分からないよ」
「適当に相槌を打ってくれればいいさ。まじめに考えるのはオレがやる」
「うーん、その旗って何本もあるんでしょ？　ぜんぶ揃えたら願い事が叶うとか！」
「何本も……集める、か……てことはこの旗は……だとすると……」
「ねえねえ、話し相手させといて独り言はないんじゃない？」
「ああ、悪い。いいとこをつくからつい、な」
「いいとこ？　あたしが？」
「ああ。あとは現物を拝みたいものだが……まだ地上に残ってる旗があるはずだよな。全知で……あった！」
「ちょっと、またわけ分かんないってば」
「すまんな、もう消えていいぜ」
「え？　ちょ……」

精霊の灯火を解除すると同時に灯火の精も姿を消す。暗くなったのに気づいて暗視の呪文を自分にかけてからヴァンは瞬間転移した。目的地は第一要塞遺跡の司令室。

＊＊＊

旗のすぐ近くに転移したヴァンは、騒音と怒号の聞こえる方を向いて身構えた。そこでは身長四メートルはあろうかという鉄のゴーレムと妖魔族が激しい戦いを繰り広げていた。

（こりゃ、妙なところに出くわしたもんだ。だが都合がいいことには違いない。さて、どうする？）

迷いは数瞬、妖魔族のひとりが何事か口にしようとしたときには無詠唱で無音の呪文を使っていた。音が聞こえなくなった空間で戦いが続いている。そこに重ねて深睡の呪文をかける。対象は魔法使いと思われる者たちのみ。反発できたものはいなかった。

そして自分は旗に向かう。全知で仕掛けを調べ、罠が起動しない手順で仕切りを外し、旗を手に取る。

妖魔族たちは不利を悟り、また目的の品が奪われたのを見て撤退の構えを見せていたが、うかつに動けばゴーレムに撲殺されるのでまごついていた。傷がないものはひとりとしていない。

そこへヴァンが追い打ちをかけた。まずゴーレムに冷気への耐性を付与し、次に小吹雪の呪文でゴーレムを巻き込んで攻撃を加えた。裏切り者の鎧を着ている妖魔が他の妖魔をかばおうとしたが、ゴーレムの巨大な拳の直撃を受けて鎧ごとひしゃげた。吹雪がやむと、妖魔族はすべて完全に死亡していた。

「さて……」

ゴーレムは次の獲物としてヴァンの方を向いた。

「オレは逃げるぜ」

ゴーレムは拳を振り上げた状態で動きを止めた。対象が瞬間転移で消えたからだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4708w/

循環魔術の継承者――双極魔術第二集

2011年12月13日06時24分発行